

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第六十七卷 第四号

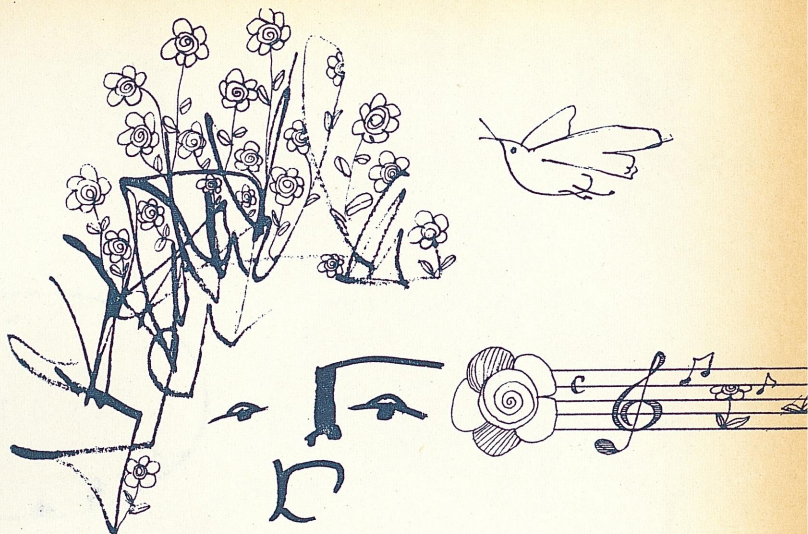


Sige

4

日本幼稚園協会

# 新学期をいっそう楽しくする歌の本



## 新しいマーチ

保田正編著 A 4 94頁

.....400円 千70円

## ぞうさん

まどみちお 子どもの歌100曲集

B 5 206頁.....500円 千90円

## ごはんをもぐもぐ

まどみちお作詞・磯部 俣作曲

B5・92頁 .....300円・千50円

## おもちゃのラッパ

湯山 昭・子どもの歌曲集

B5・202頁.....600円・千100円

## わらいかわせみにはなすなよ

サトウハチロー・中田喜直・子どもの歌曲集

B5・106頁.....450円・千100円



幼児の教育 目次

第六十七卷 四月号

表紙 小坂しげる

「遊戯」考——上——	坂元 彦太郎……………(2)
幼稚園初期における唱歌遊戯……………	清水 エミ子……………(11)
一学期の抱負とその展開……………	岡田 鈴代……………(18)
一学期の抱負とその展開……………	新庄 よしこ……………(26)
☆四月・幼稚園の先生に望む……………	飯田 泰造……………(28)
幼稚園の教師に望むもの……………	
教師の創造性と幼児の創造性(一)……………	
現代の母親と教師(1)	森田 良子……………(33)
「育ての心」をめぐって……………	
保育者養成のための教材……………	南 信子……………(39)
幼稚園管理と教師の創造性……………	
教師の創造性を伸ばす幼稚園経営の実践……………	高橋 系吾……………(45)
新任の教師に望む……………	関 計夫……………(50)
幼稚園の問題いろいろ……………	
幼児の友だち関係と教育……………	
一日々の保育にふれて……………	太田 一栄……………(57)

# 「遊戯」考——上——

## 幼稚園初期における唱歌遊戯

坂元彦太郎



↑

私たちのように、もともと遊戯ということばを常識的に、すなわち心理学者、社会学者、美学者などが普通に使っていると同じ意味に受け取って、しかもこのことに大きな価値を認めている者にとっては、幼児教育界に行なわれているような使い方は、不思議でならないのである。私は、身の程も知らずに、身をもってこのような習慣に抵抗を試してみた。昭和二十二年の学校教育法を立案する際に、(私はそのときまたま文部省の役人としてそのことに関与していた。)幼稚園の目標についての原案を書くことになって、その第五項に「音楽・リズム・絵画・製作等によって創作的表現の芽生を養うこと」としたのである。

ところが、時の法制局の役人から、「リズム」はいけない、も

っと分りやすい日本語でいえ、といわれて、残念ながら、再び現在の条文「音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創作的表現に対する興味を養うこと」とされてしまったのである。そのころは、まだ西洋語を片仮名で法律の文句に使うことは認められていなかったし、また、リズムは音楽の三要素の一つではないか、との論理であったのである。

私が、遊戯に代えて、リズムといおうとしたのは、英語の Rhythms という複数形のことであって、すなわち、音楽を奏しながらいろいろなかからだの動きをする活動をいうつもりであったのである。

学校教育法ですっかり巻き返しを食った私は、性こりもなく、昭和二十三年に出た保育要領には「遊戯」の代りに「リズム」というのを、幼児の楽しい経験の一種としてあげること

成功したのである。

しかしながら、一般的には、相変わらず「おゆうぎ」などということばで、昔のままの使い方をしている。実は、私が問題にしているのは、遊戯ということばで「リズム的ながらの動き」をいうときには、固定した形式化した身振りを意味していることが多いことであって、この点も一般的にはあまり変わっていないようである。

私などがいくら抵抗してもびくともしないこのような風習は、やはりそれ相当の理由やいわれがあるはずだ、と、私はこれらを改革したいと思うとともに、そのよってきたところをたずねあてたい、という気持になったのである。

いうまでもないことであるが、遊戯ないしは遊びは、一般的には、人がある活動をしているとき、その活動以外に別な目的があるわけではなく、それ自身のために行なわれているようなものをいう。その際、人は、楽しさを感じ、自由に心身を動かし、積極的にその活動をいとなみ、それに没入するのが普通である。遊戯の解釈については、いろいろな学者がさまざまな説明をしていることは周知のところであるが、いずれにしても、このような遊びが人間の生活に、またその発達に深い意義をもつことについては一致しているといえよう。わが国の幼児教育界においても、明治以来の多くの学者たちがその幼児生活におけ

る重要さを説き、現場においてもそれが認められてきたことは、いちいち引用するまでもないであろう。

にもかかわらず、わが国では遊戯ということばがいま述べたような本来の意味に使われながら、さらに一方では、いわゆる唱歌遊戯の意味に使われているのである。これが、広狭の両意義に使われているというだけならばそれほど問題ではないが、遊戯のうち、唱歌遊戯が代表的で中心的なものであり、遊戯の意義が主として唱歌遊戯によって達せられる、というような考えに、いつの間にかなっているとところが問題なのである。いいかえれば、唱歌遊戯がそれ自身としてたいせつであるのはいうまでもないが、それだけをやれば幼稚園教育はいいのだとしたり、その外の活動を重要視しないようになるのが問題であろう。

しかしながら、このような傾向がわが国にないとはいえないのは、やはりそれ相応の理由や原因があるからであろう。私には、しろうとながら、そのことに興味をもち、調べてみたいと思いたったのである。

△2△

明治の初年に幼児の保育の指針になったものは、明治七年七月（日本最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園すなわち、現在のお茶の水女子大学の附属幼稚園の前身が開設され

たのは同年の十一月である)に、刊行された、関信三訳「幼稚園記」であろう。

そのころの事情が、新庄よしこ氏が倉橋密三氏と共著された「日本幼稚園史」に相当くわしく述べられているのは、周知の通りである。「幼稚園記」より前に、明治九年一月、文部省によって刊行された「幼稚園」(桑田親吉訳)があるが、恩物については、この著はくわしく述べているが、唱歌や遊戯については、「幼稚園記」の方がくわしく取り扱っているのである。したがって、本稿では主として「幼稚園記」を引き合いに出すことになるのである。

「日本幼稚園史」は、その第二篇の第六章を唱歌遊戯にあて、相当にくわしく初期の事情について述べている。それをここに引用する煩は避けるが、「幼稚園記」によれば、幼稚園のカリキュラムは「物体教科」、「身体体操」、「心性体操」、「図画課」ということになっている。物体教科はまず実物の観察や恩物による教育と思えばいいが、「心性体操」をさらに三科にわけ、第一科謡歌、第二科詩賦、第三科小説としている。第一科謡歌をわけて、初段遊戯課と、後段心性課とにして、初段には八篇、後段には二十三篇の歌の訳がかかっている。そしてそれぞれに身振りや動作がついている。初段の第四篇盲想は、のちに、豊田英雄女史によって「めしいのあそび」、第五篇猫鼠は同じく

「こねずみ」として万葉調の訳がつけられ、それに「幼稚園記」にのっているとおりの遊戯がついたまま、ずっとのちまで残り、「めかくし遊び」や「猫と鼠」の遊びとなって今日にいたるまでつづいている。「幼稚園記」には、ニューヨーク師範学校長ハンドルの原序(一八七一年一月、すなわち明治四年)があつて、原著者「医生ダウエイ氏」のことを述べているが、(医生とはドクターの訳であろう)「医生ダウエイ氏ハ善良ナル遊戯及ビ爽快ナル詩歌ノ方便ヲ以テ此大日耳曼人(フレーベル氏ヲ指ス)ノ精神ヲ保守セリ。」と書かれている。

いいかえれば、アメリカのフレーベル主義の幼稚園で行なわれていた唱歌遊戯がそのまま、日本の幼稚園にはいり、そのうちに、日本在来のもの、新作のものともまじつてずつといたなまれてきたのである。もつとも、曲はすっかり変えられていたのと、ことばが邦語訳にはなっていたが、動作の方、すなわち遊戯はむこうのままであつたのである。そして、これがすなわちフレーベル精神を保守したものであるという。たしかに、わが国では、フレーベルの恩物が輸入されてはじめはそれ一辺倒であつたかのように信じられるのが普通であるが、少なくともお茶の水の附属幼稚園を入口とした流れの場合は、恩物とならんで「遊戯」がひじょうに重要視されていたことを疑うことはできないであろう。そして、それがフレーベル主義そのものであ

った。と私は信じているのである。ここには引用しないが、初期のお茶の水幼稚園の時間割りをみても、意外に、恩物の時間より遊戯の時間が多いのである。

「幼稚園記」には、「体操の若干、遊戯の大約ハ必ラス謡歌ニ合調スルヲ要ス」と書かれている。いかえれば、ダウエイ博士は、謡歌、すなわち唱歌は、からだの動き、すなわち遊戯をともなうのがしぜんなのであって、むしろ、両者を区別せず一体とみなしていたといつていいであらう。そして、このような考え方は、フレール自身の方考え方そのものであったのである。それは彼の名著「母の歌と愛撫の歌」にさかのぼって、うかがうことのできるものである。

〈3〉

「日本幼稚園史」には、新庄氏が晩年の豊田英雄氏を訪ねてきた、実際に用いられた唱歌の実例をあげてある。それは、先にあげた「盲想」(めかくしあそび)と「窮鼠」(猫とねずみ)を含む二十六篇である。すべてに歌詞がついているが、そのうち「遊戯あり」という註釈がついているのが、次の八篇である。

蝶々、風車、家鳩、兎、遊魚、民草、盲想、窮鼠

これ以外の歌は、たとえば「しろがねも　こがねも　たまも　何かせん……」とか「みがかずば　たまもかがみも……」とい

ったような、いわば万葉調のおとな向きものが大半で、これらはいわゆる修身歌で、遊戯のつけようもないものだったといえよう。

このうち、「盲想」「窮鼠」は前述の通り「幼稚園記」巻一にのっているのであるが、「風車」「家鳩」「兎」「遊魚」はこれに相当するものが、「幼稚園記附録」にのっている。この「附録」は、「幼稚園記」三巻よりおくれ明治十年十二月に、東京女子師範学校によって刊行された。「此一巻ハ、ミス・ピーボディ及ビミス・マーンノ撰述セシ幼稚園案内ニ就テ其最モ緊要ナル数章ヲ抄訳シ以テ本篇ノ補遺ニ供ス」と訳者関信三ははしがきに書いている。「第一章園説」(幼稚園の趣旨が説明してある)、「第二章結構」(園の施設や設備)について、「第三章戯劇」があり、七つの戯劇があげてあるうちに、

鳩巢・窟中の兎・風車・遊魚

の四篇があり、これが先にかかげた「家鳩」「兎」「風車」「遊魚」にそれぞれ相応しているのである。

その外の二篇のうち、「蝶々」は現在なおうたわれつづけているものであって、伊沢修二の作詞作曲振付けであった。(のち曲は西洋の曲をあてはめた。)私の推察では、日本で現存している、日本で作詞振付けしたものはいちばん古いものであろう。

また、「民草」は、全く豊田英雄氏の作詞振付けである。曲

もおそらく雅楽調の、本邦人の作であつたであろう。

この「幼稚園附録」の第四章は「教師」であつて、「幼稚園の始祖フレーベル氏」の説くように「須く幼稚ノ心情ヲ解了シ且ツ幼稚ノ日常作為スル所ノ各事ニ熟習セサルベカラズ」と述べている。幼稚とは幼児のことである。「幼稚自然ノ行為ハ造化ノ妙工タルノ信認シテ兇輩適意ノ遊戯ヲ教育上ニ活用スベキヲ発見セシハ実ニフレーベル氏ノ卓識トイフベシ。」さらに、フレーベル著書中いちばん母の心を現わしているのは「母の歌と愛撫の歌」であつて、この母の心とこどもの遊ばせ方とをよく学ぶことが、幼稚園師の養成として緊要だ、と述べているのである。

このくだりを読みながら、ふと、ここにあげてある唱歌遊戯で、しかもわが国でもおこなわれたものに相当するものが、実は、この「母の歌と愛撫の歌」の中にあるはしないか、それをいわば幼稚園流の遊びにしたものが、これらの唱歌遊戯ではないか、と、私は考えるようになって、このフレーベルの著を読み直して見たのである。すなわち、「鳩巢」「兎」「風車」「遊魚」の四篇に相当するものを、このフレーベルの著の中にさがしてみたのである。「母の歌と愛撫の歌」は、一八四三年フレーベルが出したものであつて、いろいろな批評もあるが、フレーベルの作中、その精神を端的に示した名作であることは周知の通

りである。わが国にも数種の翻訳があるが、明治三十年に初版を出した、アンニー・エル・ハウ女史訳の「母の遊戯及育児歌」(頌栄幼稚園発行)と、昭和九年に出された茅野肅々氏訳「母の歌と愛撫の歌」(岩波書店)を私は手にした。

後者は、ジャバン・キングダーガーテン・ユニオンの依頼によつてなされたものであるが、原著初版の版画や原文がそのままのせてある珍しいものである。ハウ女史の訳は、わが国最初の訳であり、挿絵をすっかり日本化しているのも珍しい。

フレーベルは、此著を乳児、一、二歳ごろまでの幼児をもつ母親のために書いたものである。おそらく、彼の周囲にある母親たちのしていること、口ずさんでいることをよく見、それをもととして歌詞を書き、それにとまなう遊戯を書いたものにはない。しかしながら、この歌としぐさは、彼の神秘的な世界観、深い宗教的な信条によつて裏づけされ、意味づけられたものであつた。母親たちの歌やその子をあやすしぐさは、深い神の思召しにかよう愛情の流露であり、そのひとつひとつに、深い教育的な意義が含まれているのであつた。この本に盛られている、五十六篇の遊戯の歌は、母親がこの深い意味を蔵している歌を歌いながら、指や手や腕などを使っていろいろなしぐさをして幼児にみせたり、まねさせたりするのである。「ほがらかに真面目な遊戯と歌で、母がごとくも呼びさまし育てるも



の、彼女の愛が守りつつ包むものは祝福しつつ子孫の末までも働きつづける。」(茅野氏訳)

これらの歌と遊戯とは、かの恩物とひとしく、神からのさずかりものというべく、それに親しみ、幼児に親しませることが、幼児たちの発達のために大きな意義をもつ、としているのである。

〈4〉

私が調べたところによると、「家鳩」「兎」「遊魚」「風車」の四つが、「母の歌と愛撫の歌」の中にある。このことを、わが国で指摘した人はいまままでなかったように思う。

先ず「家鳩」について見てみよう。これは「幼稚園」にも「幼稚園記附録」にもほとんどそのままのものがのっているが、茅野氏・ハウ氏の訳では次のようになっていいる。

鳩の家(茅野訳)

鳩の家を今開ける。

鳩はうれしく飛んで出る。

ほんとにほんとに気に入った。

緑の野べに飛んでゆく。

それでも寝には帰ります。

するとお家をまた閉める。

鳩小舎(ハウ訳)

我は今 我鳩小舎を 開きつづ

外にといえば 鳩はみな

野原をさして 飛び去りぬ

かくてたのしく 一日を

すごして夕に なりぬれば

ふたたび帰る もとの小舎

かたんどぎして またここに

やさきねむりを 与へけり

たのしきひるの 夢を見よ

以上を、わが国で長く用いられた豊田英雄作の歌詞と比較し

てみよう。

家鳩

いへばどの すのとひらきて

はなちやる ゆくゑやいつこ

やまにのに しばふのはらに

あそぶらん あそびてあらば

かへらなん とくかへらなん

かへらずば すのとどちてん

すのとどちてん

念のために、原語を私が直訳してみよう。

## 鳩の家

私はいま私の鳩の家を開ける

鳩たちはよろこんで飛び去る

鳩はかなた緑の野へ飛び行く

そこで鳩たちはとても楽しいのだ

でも彼らはやすらかな眠りのために帰ってくる

そこで私は再び小屋を閉ざす

拙訳とくらべると、茅野訳は原文通りであるが、ハウ訳は相當な意識である。(あるいは英訳を参考にしたのかも知れないと思ったりする。)豊田作は、趣旨は大体同じであるが、少しちがうところがあるのは、幼児たちに遊戯をさせるさせ方のちがいと対応しているように思われる。

わが国の幼稚園でこの遊戯をやっている有様は、有名な「鳩巣遊戯の図」という明治十年ころのお茶の水幼稚園の実写図(原図は、大阪市愛珠幼稚園に現存)でうかがわれる。この歌を歌いながら、幼児が手をつないでつくった環の中に、二、三人の鳩になる幼児をいれておくが、「すのとひらきて」でつないだ手を離す。鳩は外に出てあそぶが「とくかえらん」のところで鳩は急いで帰ってくるし、環の幼児はいそいで手をつないで閉めようとする——といった遊戯である。

ところがフレーベルの原著では、一、二歳の幼児のために、

母親が両方の手で鳩小屋の形をつくり(ちょうど、握飯を握るような格好で)、指を開いたり閉じたりすることによって鳩小屋の開閉を示すようになっていゝ。そして、子どもたちにも、二つの手の指をノまく組み合わせるようにまねをさせるのである。フレーベルにとっては、これは歌と手あそびにとどまるものではない。この歌の前に、より小さな文字でこのような詩の韻をふんだ註釈がついているのである。

子どもは内に感ずるものは 外にも出して遊びたい。

鳩が遠くへ飛ぶように 子どもも外出を喜ぶ。

鳩が家へ帰るように 子どもも直ぐに家路を見やる。

見つけ出したものを 五色の花束に結ぶよう、

家で世話をしてやろう。

別々になつていたものを 歌で結び合せたい。

そうすれば生活が全くなる。(茅野訳)

さらに、附録には、この歌ならびに、手や指の運動、挿絵について、その内蔵している象徴的な深い意義が、神秘的な崇高なことで長々と語られているのである。それは、とてもかたんなる要約で紹介することのできないほどあまりにもゆたかで、寓意に充ちているのである。

むろん、西洋のフレーベル主義幼稚園で多数の年長の幼児の集団のために、しぐさはつくり変えられたのであろう。それを

経て、そのままがわが国の幼稚園に伝えられたのであるが、その象徴的な意義はうすれたとしても、唱歌と遊戯とが結びついたものそれ自身が幼児の生活の中にもつ意義の重大さはそのままとされたであろうし、いや、むしろ、それ自身でたいせつなものとしてその位置が確立されてきたのであろう。

〈5〉

「遊魚」についてみてみよう。

小 魚（茅野訳）

澄んだ小川で楽しそうに

小さい魚は遊んでる

その中を何時も泳ぎ廻る

真直ぐになつたり曲つたり

遊 魚（豊田英雄詞）

みづにすむ うろくすまでも

よのさちは ともにぞうくる

みづのにも ひれふるさまも

さまさまに うかぶもあれば

ひそむあり のぼりくだりも

おのがじし ゆたにありけり ゆたけかりけり

フレーベルは次のように遊戯を説明している。「幼児は、母

の左の腕にやさしく抱かれながら、彼女の膝の上に腰かけるが、あるいは彼女の前のテーブルに坐っているようにする。母の両手は水平の位置に置かれ、いくらか平行し、彼女から外方へ出されている。指はたがいに無関係に伸びたり曲つたりして、水泳を模した運動をする。」（茅野訳）

しかし幼稚園では、「家鳩」のときのような隊形で整列し、歌を歌いながら、からだを真すぐにしたたり曲げたりする。中の子どもたちは魚のおよぐまねをして歩きまわつたりするし、まわりの者は池になつたつもりでぐるぐるまわる。（幼稚園記附録）による）

風 車（豊田英雄詞）

かぎぐるま 風のままにまにめぐるなり

やまずめぐるも やまずめぐるも

みづぐるま 水のままにまにめぐるなり

やまずめぐるも やまずめぐるも

塔 上の鶏（茅野訳）

塔の風見の鶏が、風や嵐に廻るように。

坊やお手々を廻せませ、新たな喜びがあるならば。

この第四句は誤訳ではないだろうか、むしろ「新たな喜びがわいてくる」とでもいう方が原義に近いと思う。

このフレーベルの原歌に対して、わが国の幼稚園でうたつた

ものは、水車についての第二聯が加えられている。しかし、これは、すでに「幼稚園附録」ではこの通りになっているので、すでに彼の地にあるときに加えられたままのものが、わが国に入ってきたものであろう。

「兎」については、フレーベル作のものと比べると、いつそこのちがいがあつた。わが国の幼稚園ではやつたものは、三段からなつてゐる。「幼稚園附録」のつてゐるものそっくりである。兎が獵師にねらわれて逃げることを歌つてゐるのであるが、「母の歌と愛撫の歌」の場合は、両手の指を組み合せて兎の形をした影絵を壁につくることになつてゐる。獵師などというこゝばも出てはくるが、相当にちがつたものになつてゐる。しかし、大きく見れば、同じような意味をもつてゐるので、やはり、これの影響を直接に受けてゐると見ていいであらう。

別のことであるが、このごろラジオでよく歌われた「これはお父さま」ではじまる、五本の指の歌は、やはりフレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の中にある「なつかしいお祖母さんとお母さん」の第二聯とそっくりである。

これはお母さま、なつかしい。

これはお父さま、上ぎげん。

これは兄さん、大きく高い。

これは姉さん、お人形を膝の上。

それからこれが坊や、小さく可愛い。

これはよいお家族で、

かしこい力を合せて、喜んでよい事故します。(茅野訳)

以上、見てきたところを要約するならば、こうなるであらう。

わが国で、遊戯といふことを主として唱歌遊戯の意味に使用し、それを幼稚園教育のうちでひじょうに大切なものにする、という習慣は、つまりは、恩物などひとしく、フレーベルの直伝であつて、フレーベルの「母の歌と愛撫の歌」の趣旨が、フレーベル主義の外国の幼稚園を経て、わが国に伝わり、それ以後絶えず変化成長をつづけてゐるのである。フレーベルの象徴主義的な意義付けはうすれたが、その重要視したところだけがそのまま現実的なものとなつて今日にいたつてゐるのである。

わが国の唱歌遊戯のはじまりは、すでにフレーベルないしはフレーベル主義幼稚園にあつたところのものを、曲はずつかり変え、歌詞は適当に翻訳したが、遊戯の所作そのものはほとんど直輸入のままであつた、といふことができよう。これが、在来の伝統的なもの（「かごめ」「はないちもんめ」など）とまじり、新作も加わつて、のちの日本の唱歌遊戯ができあがつてゐつたのである。

なお、明治以降今日にいたるまでの唱歌遊戯の変遷については、次の機会に述べてみたい。

# 一学期の抱負とその展開



清水エミ子

「今日、四時から8チャンネルで、〇〇〇〇やるな、きみ見てる」

「ほく、夕方いつでもるすばんしてるんだよ。ひとりだってへいきだよ、テレビかっこのいいのやってるから、ずっと見てればいいものね。マンガがずっとあるものね」

「あたしも妹といっしょにテレビ見て、るすばんしてるんだ」

「少しおつかいにつれて歩こうと思って『行きましよう』といっても、『でかけると、5時からの、〇〇〇〇テレビ見られなくなるからいかない』といっついてきたがらないのです。ときどき親の方がさみしくなることがありますよ」という母親。

テレビに育ててもらっているのではないかと思われるような子どもたち、テレビのチャンネルは、数字がよめなくても正確にカチャンと回せるくせに、自分のいろいろな行動、生活の中で活動のスイッチはいっこうに、カチャンと入らないのです。テレビのチカチカしたスピードに反比例して、子どもたちの行動も思考力も、のんびりのっそりしてしまっている。

こんな状態の子どもたちに、ガッチリダイヤルを合わせ、電流を通して、元気に活動できる子にするのには、どうしたらよいのだろうか。自分の力で、人生を開拓していける子にするのには、私たちおとなは、どう子どもたちの前に立ち向かったらよいのだろうか、と考えると、ああもしたい、ここもこうしてみようと、果てしなくその未来は広がっていくのだ。

## 一、一年保育の五歳児の入園当初

・一日も早く子どもたち自身で楽しく行動できるようにしたい。集団の中でじっととまっていず、自分の足で、歩き回りながら、自分の世界を開拓していける子にしたい。  
・幼稚園の中を、縦横無尽に動き回って活動し、楽しくだれとでも話しあえるようにしたい。

・子どもたちで、楽しみながら、暮しのリズムを作り出させたい。

・考えて行動し、やってみて、確かめ、くりかえしながら正しいものを自分でつかみとらせたい。

・困難なことがらを友だちと協力して解決していける、ねばり強さを身につけさせたい。

・簡単なことから自分の力でやれたという成功感を味わわせ、やればできるといふ喜びと自信を持たせ、どんなことにも勇氣と自信をもってぶつかっていける子にしたい。

・絵本やおはなしを楽しめる情操豊かな子にしたい。

・ひとつひとつの活動に楽しみながら参加し、大きくなった時に楽しい思い出になるように、活動の展開を楽しいものにしたいたい。

私の抱いている幼児像のようなものが、ホッと目の前に広がっていく。

・「あのねえ、先生」「先生、このほうがいいでしょ」と、いつでも子どもの生き生きした声と、動きがみちあふれている学級。

・そして、ひとつのことをやり出すとシーンと静まりかえって物ごとに熱中できる学級。

・「〇〇くん、こうやってみれば、こうやるといいよ」「うんありがとう」と明るく交わる(教え合う)雰囲気のみちあふれている学級。

と、こんな望みを胸いっぱいにつめこんで、入園式の時、子どもたちの前に立つのだ。

そして、私の学級がスタートする。

いろいろの問題が山積している子どもたち、どれからどう手をつけたらよいか迷う。しかし私は、いつもひとつのことがらを自分にいい聞かせながら、あせらず、ゆっくり、見間違わないように時間をかけて、ひとつひとつを、どう仕向けたらよいかと、問いかけながら問題に立ち向かうようにしようと努力している。

これこれの活動は五歳になったらここまでできなくてはいけいないのだと、どこかの保育書まるうつしを決めつけるのではなく。

「こんなことが、このような状態で起こってきたからどのように仕向けていかなくはないか」と、子どもをみつめなおすことを(子どものありのままの状態から学ぶことを)第一に考えなくては思っている。

だから一日の保育を、子どもが帰ったらすぐ、

・子どもは楽しんだか。

・おちこぼれは、いかなかったか。

・子ども自身の活動になっていたか。(保育者が決めつけで、活動をさせなかったか)

・あしたへの発展があるだろうか。

・どこをどのように反復させながら、次への段階にのぼらせたらいのか、を反省し、評価しながら、ゆっくり一步一步、坂道をはたいていこうと考える。

### 一 たのしい幼稚園を知らせるための活動と展開

(みんなといっしょにいると楽しいことを知らせる)

## ○新しい友だち

今まで知らなかった同年齢の友だちをひとりでも多く、スムーズに知らせていくのに役立つ活動を多く取り入れる。

- ・あくしゅで手をつなごう。
- ・あなたの名前はなにに。
- ・名札の見せ合い。
- ・同じおもちゃで遊ぼう。
- ・同じ道を通ってくるもの同士、いっしょの机にすわったり、いっしょに歌を歌ったりする。
- ・同じ道を通ってくるもの同士のお母さんもいっしょに、なかよしになることを考えて、入園式の時の親の座席なども、クラス別地域別に作っておくのもよい。

## 二、集団生活に、きまりのあること、そのきまりを守って生活すると楽しいし、気持のよいことを知らせるために役立つ活動の展開

### ○時間を守らなくてはいけない

・登園時間を守ることを、おくれないうで幼稚園にくることを、まず楽しく知らせる。「時計の針が、こんななかつこうになるまでにくるんだわね。みんなは、どんななかつこうの時にお部屋に入ってきたかしら」と、時間に関心を持たせる。

### ○きまった持ち物(所持品)

・おそろいの上衣をきて、ハンカチ、はな紙を持ってくる。

・かばんをしょって、帽子をかぶってくる、などを知らせる。  
右のポッケはハンカチあるかな、左のポッケにチリ紙あるかな、自分で、でかける前に調べましよう。

入園当初、不安な気持のとりきれない時、自分のポッケからハンカチ、はな紙を出してひろげたり、たたんだりして、自分のもの、身近に親しんでいるものをさわることで安定して、その場になじんでいけるようになる。ゆっくり時間をかけて知らせます。

カバンをかけるのも、まがらず、まっすぐかける。かけ方も、「こうしよう」というのでなく、カバンのきれいなかけ方がしをして、どっちがきれいなかけ方か、自分の目で見てくらべて、考えてしまつてできるように仕向ける。「こうしなさい」でなく、はじめから五官を通し、自分の力で正しいものをつかみとっていく態度を知らせていく。

### ○交通のきまりを守って通園する

・ばくぜんと知っていた交通のきまりをはっきり知らせる。  
・きまった道をきたり、帰ったりする。  
・横断は、手をあげて、右左を見てわたる。  
これも現場で、実地にやってみる。警察の交通係りの方に手伝ってもらって、入園してすぐにやってみることが大切である。

### ○おもちゃで遊ぶ

・保育室のいろいろのおもちゃで遊びながら、友だちとの交わりを知らせたり、幼稚園の環境に慣れさせる。  
・おもちゃの位置やおき場所を毎日変化させておく。

・新しい環境にして毎日毎日を新鮮な感覚で生活できるようにしておく。

・あまり大きく変化させ過ぎると、かえって安定を欠き、不安定になるので、その程度は適当にしないでほならない。

・積木などきちんと決められた所に整とんだけしておくのではなく、室の数個所に散らばしておいてみる。

・あまりきちんとしてあると、どこから手を出してよいかとまどうことが起こるから、らかな雰囲気でおいてあると思わず手を出して遊び出すことができるからだ。

・マリ、ママゴト道具なども、ところどころにいろいろな環境で設定するくふうをする。

・そして思いがけない交わりの場と、遊びのきまり、遊び方などをのがさずみつめ、指導助言の場を大切にするとともに、ひとりひとりの子どもの状態を早く把握することに役立てる。

○園庭の花壇を見たり飼育動物を見たりえさをやったりする

・ひとり遊びだしにくい子、保育室に抵抗を感じている子などと手をつないで戸外に出て花壇を見たり、飼育動物（カメ・キンギョ・ウサギ・小鳥など）の動きを見たり、そつとえさをやってみたりしながら、子どもたちの興味の傾向をキャッチすることが大切。

・じつとみつめている目や顔の表情からひとりひとりの特徴をみきわめるように。

・ばくせんと見守るのでなく、目的意識をもって見守るようにし

たいものである。

・小さな変化を入園当初は、たくさん見つけることに心がける。

この変化はブラブラ歩きをしている時、ボンヤリ花を見たり動物の動きをながめている時に、子どもたちの本来の姿として表わしてくる。

・そして保育者はゆっくりとしたテンポで、静かに子どもたちに話しかけるようにする。まず、保育者とのつながりをしっかり持つてから集団に気楽に入っていけるように仕向ける。その仕向けるキツカケを園庭をブラブラしながら見きわめることも大切なのだ。

○みんなで歌う

・みんなの知っている歌を自由に歌い合いながら、みんないっしょだ、みんなの声の中に、自分の声もまぎっているということを知らせながら歌う。

・机ごとのグループといっしょに歌ったり、女の子だけ、男の子だけ、というようにいろいろなグループ（形式）で歌って、グループにいろいろなことを活動しながら知らせていくようにする。（一年保育児なので、特にこんなことは意識的にやってみるようにこころがけたいもの）

・声を出して歌うことの楽しさを知らせ、保育室の中がいつも気楽に歌声がながれるように、保育者は、ふだんも歌を口ずさめる雰囲気をつくるように心がけたい。

○自由にクレヨンやマジックインクを使って描く

・大きな紙（模造紙・ラシヤ紙など）にみんなで、ぬたくって遊



ぶことから楽しませる。

・小さな画用紙にクレヨンで、何かを描かせることをいそがず、クレヨンで描けることのふしぎさと楽しさをまず知らせる。

・そして描くこと(何かまとまったものを)に対する抵抗を取りのぞいていく。

・こんなことを十分にしたあとでなら心に感じたことをだまっても描きたくなって、ひとりで表現するようになるのだ。

・材質になじむこと、材質を知らせることを第一に考えたい。

○はさみで、チョキチョキ切ったり、はったり

・家庭では、あぶながって自由に使わせてもらえなかったはさみを自由に使いこなさせるために使わせる。

・何かの形を切るのではなく、はさみの切れる心地よさを味わわせる。

・そしてはさみの扱い、持ち歩く時、(自分の戸棚から持ち出してくる時)はさみの刃の方をぎゅっと握って持ってくる。はさみで切つてはいけないものは、やたらに切らない、などを、約束しながら使わせる。

・きちんとした紙などをはじめに与えるのではなく、気楽に切れるもの(失敗感を味わせないですむもの)から与える。

・新聞紙、包装紙、広告紙などを自由に切りぎませてみる。

・その切りぎざんだものを、カラーの台紙にのりで思い思いにはらせてみる。思いがけない構成の楽しさと美しさを知らせる。

・切りぎざんだものの残りをみんなでダンボールにはりつけて、

ボール入れをこしらえたり、材料入れを作ったりして共同製作のやり方なども自然に知らせていくように心がける。

・ここで大切なことは、みんなひとりで考えて、自分の手で作りあげたものであることをくりかえし知らせ、自分でやったんだ、やればできるのだ、という自信をしっかりと持たせたい。こんな活動をていねいに時間をかけて扱うことによって、五月、六月と活動が進んできた時、母の日、父の日などのプレゼントつくりや、共同製作などのやり方をはやく把握していくのだと思う。

○散歩に行く

みんないっしょに行動すること、保育者のいう通りに行動することを知らせる。そして友だちとしっかり手をつないで歩くことから、友だちのぬくもりを、じかにはだから知らせる交わりの場にした。

前の友だちについて歩く。これは簡単なようで、子どもたちにはなかなかむずかしいことなので、一べんにたくさん歩かせず、ほんの少しずつとなりの家に行くくらい距離からはじめて、繰り返しながらだんだんたくさん散歩するようにしたい。

○鬼遊びをする

自分だけでは遊べない遊び、相手を意識して遊ぶ遊びをさせ、遊びや活動には、それぞれ役のあることを知らせたい。そして役割分担ということをスムーズにわからせ、実際にやれるようにしたいのである。

つかまえる鬼の役と、逃げる役とがあつて、鬼遊びが成り立つ

ことを知らせる。

- ・まず、保育者が、鬼の役になって、子どもが逃げる。
- ・それから、子どもの鬼が、帽子をかぶったり、物をもったりして、(鬼であることを目じるしをして) 友だちをおいかける。

こんな遊び(体をふれあいながらする)を通してそれぞれの友だちを知らせていく。体を動かして遊ぶ楽しさとルールのある遊びのおもしろさ、それを守って遊ぶことの楽しさなどを知らせる。

### ○誕生会

友だちの喜びを、すなおに喜んだり、祝ってあげたりする、やさしい心を育てたい。

四月に生まれた友だちに、おめでどうをいい、ありがとうのあいさつをいうことを知らせながら、いろいろのあいさつのあることをわからせる。自分の気持をすなおに、ことばでいい合えるようにさせる。

友だちが大きくなったことを喜び、もっと元気なよいになるように、みんなで励まし合うことを知らせる。そのために誕生日の約束をする。「六歳の約束」と子どもたちは、いつている。

- ・交通事故にならないようにね。
  - ・病気になるないようにね。
  - ・もう泣き虫しないでね。
  - ・失敗してもがんばってやりなおしてね。
- というように、その子にあった努力点をひとつふたつ約束し

て、努力させるようにする。そして仲よしになった友だちと、握手をしながら、「約束します」とちかわせるようにする。この約束を友だちの手作りの誕生カードに記して、おくりものにする。

### ○はじめてのお弁当

生まれてはじめてひとりでする食事。楽しみにしている気持ち、ちゃんと食べられるかなという不安もまじっている。

家庭では母親などが、食べるばかりに準備してくれたものを、はしを持って口にはこべばよかった。しかし集団生活では、自分でカバンの中からお弁当を出して、食べられるように準備しなくてはならないのだ。

当然知っているとと思われるようなことから(お弁当の手前にはしをおく、はしをおいてお湯を飲む、など)まで、ていねいにくりかえし、確かめながら知らせていかななくてはならない。

正しい食事のマナーは、短い間にきちんと身につかせねばならないのです。

- ・こぼれたごはんやおかずはひろって食べない。
  - ・口にごはんを入れたまま、しゃべらない。
  - ・はしを持ったまま、お湯を飲まない。
  - ・おかずとごはんといっしょに食べる。
  - ・「いただきます」「ちそうさま」をきちんとするようにさせる。
- 食べる前、食べ終わったあとの手洗い、うがい、食後の休息などを、時間をかけて知らせるようにする。

これら、ひとつひとつのきまりを、集団でする時の方法を、子どもたちに考えさせ、きまりの必要をわからせるようにする。

数少ない水道を、どのようにして使ったらよいか、おぼんをどうやって取りに行ったらよいか、こぼれごはんをどこにしまつたらよいか、なぜ、口にごはんを入れてしゃべってはいけないのか、はしを持って、お湯を飲むとどうしていけないか、数が少ないから、ならんで順番にする、などのようにそのつど具体的に知らせるようにする。具体場面で、ひとりひとり知らせないと、いわれなくてはしない子、自分から進んでやれない子ができてしまうので心配しなくてはならない。

楽しくお弁当を食べさせ、食べたものが栄養になり、エネルギーになるように習慣づける。

一年保育児の入園当初は年少児の入園当初のカリキュラムから出発し、だんだん二年保育、年長児と差がなくなるように指導しなくてはならない。そのため、入園当初の一日一日を、きめの細かな計画で進めていかななくてはならない。

入園したばかりだから、「まだいい、まだいい、そのうちに」は、一番危険な考え方である。

五歳児（年長）は、入園当初といってもこちらの仕向け方で、どんなでも方向づけができる可能性があるのだ。子どもたちが、楽しんでできる活動の配列を、子どもの状態に適したもの、その学級の進度に合ったものを順序立てて、考えていかななくてはなら

ないのだ。

こんなことかと思うこと今まで、細心の配慮をし、子どもを甘やかさず、ひとつひとつの活動を通して、自分で自分を確かめながら発展させていけるようにしなくてはならない。

まず、やってみる子、やってみて考え、くりかえし確かめながら、自信とやりぬく信念を身につけた子に育てたい。

（足立区立関屋幼稚園）

### 日本保育学会第21回大会

会期 昭和43年5月18日（土）・19日（日）

会場 宮城学院女子大学

内容 (イ) 研究発表

(ロ) シンポジウム

連絡先 仙台市東三番丁一六六

宮城学院女子大学内

日本保育学会第21回大会準備委員会

TEL—〇二二二の二一の六二一一

# 一学期の抱負とその展開

## —成長過程のなかで ひとりひとりの姿をおって—



岡田 鈴代

### (一) はじめに

家庭を中心とした、近隣のごく限られた環境から、今までに、経験したこともない集団に入りこんで、不安をいっぱい感じていた幼児たちを迎えたその日から、私の夢は、大きくふくらみます。しかし、限られた幼稚園の貧困な環境の中から幼児らに何を、どのようにしてと、苦しみがはじまります。

ただ、私どもの熱意と愛情を与えることによって、いくらかでも充実した保育ができないものかと、自分で自分を励まし、希望と祈りの折りまぎったスタートをします。

それにしてもこの頃、自分の保育のやり方に対して不満を覚え、反省しているのです。つまり、幼児の本当の姿を見あやまっていけないだろうか、正しく幼児の要求を理解していない場合が多々あるのではないだろうか。

また、幼児らしい自由な創意や、素朴なはつらつさを、十分に引き出すことができたのであろうかなど、次々と反省の度合が深まるのです。

しかし、そんな苦しみも容赦なく、幼児たちの活動は展開されます。

そこで今年、ひとりひとりの幼児を大切にすること、教育の根本理念に基づいて、どこまで幼児の遊びの生活を、十分に確保することができるものだろうか、辛抱強い愛情の交換を展開したいと思っております。

「もしも子どもが受容と友情と、ともに住むならば、彼は世界の中に愛を見出すことを学ぶであろう(作者不明)」という言葉に心うたれて、私なりの展望と展開について、まとめてみたいと思います。

なお、当市(三重県四日市市)の公立幼稚園は、一年保育です。

## (二) 一学期における展望

幼児が満足した遊びをしているときに、最善の発達をするといわれていますが、その遊びが、幼児自身の遊びや仕事を、あらかじめ予想して計画的に、行なう姿は、一学期の初期にはあまり見られず、自分に内在している能力を発揮することによって、遊びに対する喜びを味わっているのがこの頃によくみられます。ですから、五歳児の段階にしては、未熟な内容が続いて、私どもを、はらはらさせたり、また、いっこうに遊びの発展がなく単純な想像性のない場合がみられるのです。

それでは、このような時期にどんな環境を整えてやれば自分たちの遊びに愛着をもち、のびのびとした活動が、ひとりひとりの幼児の間に発展するのでしょうか。

砂場コーナー、一つを例にしても、大シャベル一つ持ち出しても、誰にも迷惑のかわらないくらいに砂があり、砂のトンネルをくぐりぬける汽車の動きにも、広々とした場所があり、必要な材料は物置にあり、珍しい材料の探検にも出掛けるくらいの品物が、山積されていれば、(丸や四角、太い細いなど、あらゆる形の木片からホース、レンガ、タイヤ、エントツ、小ハシゴから板一枚に至るまで)いま自分が、必要としているものが次々と、歓喜した幼児たちの手で運びこまれ活用されるでしょう。そんなと

き、一人で持てぬ材料とか、ダイナミックにならざるを得ないような配慮があれば、しぜん友だちを必要とするでしょうし、そのことにより遊びは、さらに発展するでしょう。

また、秘密の場所を喜ぶ幼児たちのために、各部屋に四か所ぐらい、隅にカーテンを二方引いておくだけで、あるときは虫の部屋に、(ホテルなど観察によい)あるときは仲よしグループの会話の場に、またホテルになったり、かくれ屋になったり、幼児にとつて一等地にあたいする隅の用意をします。

園庭には、虫の巣とともに、木々の茂みがあり、山や、ほら穴があれば、インディアンや仮面などの大活躍の場として、太鼓の音も高々と響くことでしょう。また小高い所に腰をおろし、童話を聞きながら、ゆったりと落ち着いたひとときを過ごすこともできるでしょう。

また、機械類(幻灯、プレーヤー、テレビ、テープ、時計、電話)など、最初から責任をもたせて操作させます。教師のちょっとしたヒントにより、自分たち同士で自由に操作してかけるうち、馴れてきますと、目的をもってかけたりします。弁当を忘れて来たときなど、自分でダイヤルを回して家庭に連絡します。

全身、体当たりで遊べるホールには、マット、平均台といったような体育的遊具が一応おいてありますが、劇遊びや、身体表現の場ともなりますので、大きな風呂敷くらいの色布や、大小それ

その小道具と変装できる箱など整えてやれば、スカートの端をもって表現する身体的リズム反応の欲求を満たしてやれたり、あるときは、基地や格納庫と変じて、自分たちで作ったロボットや、飛行機が活躍して遊べるでしょう。

また、リズム楽器を腹一杯弾いたり、叩いたりするために、防音装置ができた一室があればなど、いろいろと数限りなく望みが生まれてきます。

それについても、どのような活動の場合にも、絶対見逃すことのできない、社会的、身体的、知的、情緒的発達が教師や友だちとの間の信頼や愛情との上になつて、ひとりひとりの幼児にとつて、十分に行なわれなければならないことだと思ひます。

なかでも、一学期には、人的に造り与えたものよりも、素朴な遊びや情緒をたいせつにし、それを強く深く感じ抜き、のびのびと自由に活動させる間に、ゆっくりではあるが、しぜんに充実した活力をのびしてやりたいと願っています。その中で、ひとりひとりの幼児の情緒的反應の治療もできるでしょう。

### (三) 展 開

幼児の活動が、はじまりますと、個々の行動の特性もいくらか、はつきりしてきます。

それを大まかにあげてみますと、

(イ) 一つの遊びに、長い時間興味をもち安定して、ひとり遊ぶ幼児

(ロ) すぐに、友だちとの交渉ができ、気軽に近づいて、いっしょに遊ぶ幼児

(ハ) 遊んでいても、興味がなく、常に好きな友だちの後ばかり追つて落ち着きがない幼児

(ニ) 遊びの内容が一つのことに限られて、別の材料や遊具になかなか、手をださない幼児

(ホ) 全然あそぼうとしない幼児  
などに見わけられました。中でも(イ)(ロ)が多いのに、とまどいを感じました。しかしわずかぐらいの期間で幼児たちの行動の解を急ぐのは、幼児の理解を固定化するので、それはさけて、教師と十分遊ぶことから、行動の場面で幼児を理解することにしました。

幼児たちが、自由に自分たちでグループをつくつて遊ぶようになることは、幼稚園教育にとつては、たいせつなねらいであります。しかし、そうなる前段階として、一学期では、ひとり一分遊んだり、教師と一対一で、ひとりひとりの幼児と常に遊ぶことの楽しさを経験させてやりたいと思うのです。

そこで、以下に昨年度の実践の例をあげてみます。つまり、これらの実践の上になつて本年度はさらに前述のような点に留意し

で、より充実した指導をしていきたいということのためです。

#### (1) 入園当初の実践と教師とのふれ合い

遊具をみても全然手もつけずに眺めている無口な幼児が、ふと手にした油粘土を、くるくるまるめて見つけた私は、その幼児のそばに坐り、「何かしら、おむすびみたい」といいますと、「はい」と手に渡してくれるので、「うれしい、中に何が入っているかしら、シグレかな」といいながら割って中を見るようにして食べる真似をしました。

すると、次々と二つ三つ、まるめたと思うと中に「これシグレさ」といいながら、ヨーグルトのふたを入れて、私の要求通りのおむすびを作ってくれるのです。「うれしい、たくさんできたのね、じゃあシグレの入ったおいしいのをいただいて」と、少々大きな声で話しながら食べていますと、一人二人と寄ってきて、おもしろそうに、そのようすを見ていましたが、そのうちに彼らも作りはじめ、「お海苔巻いてあげる」なんていいながら、私の口元までもってくるのです。私は周囲の幼児たちの集中のまなざしの中で、いとも大きな口を開けて、ムシャムシャやりますと、幼児らは手をおさえて「フフフ」と笑い声を出してくれるのです。

このような小さなチャンスを十分利用して、ある程度の時間落ち着かせて遊ばせた頃を見はからい、(私は、少々本来の茶目っ気がすぐ飛び出しますので)おむすびを三個石鹼のあき箱に入れ、

おじいさんになって「おむすびころりん」の話を、そばにいる幼児に聞かせました。幼児たちは手をとめて、話のおもしろおかしい動作に自然と頭をふってみたり、「知ってる」といいながらも、口をもぐつかせながら聞き入る態度がみられました。

また、消極的な女兒が、大きいまりで一人つきを隅の方でしているのを見て、私は、とかく消極的な幼児は、運動的、言語的な行動が少ないものなのに、この幼児は、まりがうまくつけるだけで、チャンスさえ与えれば自信を得ることもみられるのではないかと思ひ、即座に「ちょっと、こちらへいらっしゃい」とピアノのそばでつかせました。

「じょうずね、ピアノに合わせてくれる」と頼み、まりつきの曲、*4*を合わせてやりますと、うまく合うのでいつまでも楽しそうにつきます。参加者も二人できた頃、見ている友を誘って、まゝるく手をつながし、まわりの幼児は曲に合わせて歩き、曲が終わったら止まる。そのときまりをついている人の前に立った人が交代して、中でつくというように少しのヒントを与えますと何の抵抗もなく数人でおもしろく遊びます。このようなことは、いくらでも部屋のおちこちで見られます。(また、リズム反応の基礎的なものも、このように興味を示して、遊んでいるときにとりあげた方が効果的だと思います)

しかし、一日も早くグループ活動をやらせるために行なってい

るではありません。

教師と幼児の心のふれ合いは、このような出会いをたいせつにしながら成立させていくことがあるのではないかしらと思うからです。教師対個人という、つながりを手始めとしているうちに、徐々に幼児同士の交流にもなるのだと思われるからです。

(2) 言語表現の場を広める中で

昨年度は全体的に言語表現が豊かでないばかりか、感情のコミュニケーションをうまくできない無表情な幼児が多くみられました。そこで、幼児から言葉を出させる雰囲気のある場を与えること、どんなことがらでもすぐ聞きとり、その場で認めてやることに努力しました。

自分のことで精一杯だった頃から、少しずつ遊びの意識化がみられるようになった五月のある日、テーブルを使って、簡単な話から問いかけ遊びをしたとき、(牛乳屋さんだけが知っている話よ  
り)

「毎朝、牛乳屋のおじさんが、一軒一軒に牛乳を配っている  
と、その中の一本が、ゆらりゆらりと空へのぼっていくのです。  
一体誰がのむのでしょうか。Kちゃんかしら、Dくんかしら」  
そばにいる幼児の名前を呼んで問いかけます。

D「お月さま、のむの」

K「お星さまに小さい赤ちゃんが生まれたから、赤ちゃんのむ

の

教師「だれかしらね、一度お空に向かって、大きな声で聞いてみましょうか」

K「ふん」

教師「それではね、高いから大きい声で、はっきりいって」

すると、声を出すことに対して今まで少々躊躇していた幼児も大声を出したのです。

このように、短い会話のやりとりをし、テーブルに入れます。すると、今一度自分たちの声とともに話した言葉を聞くことができるので「あれ、僕が言ったん」と喜びを再現することができ  
ます。とかく無口な幼児との話し合いには、教師が一方的に話し、彼らは返事をするぐらいで、あまり内容のある話が生まれてこない場合がありますが、こんなことを、きっかけにしていろいろ話し合いの場をもちます。

また、こんなことがありました。カップ二個に紐を通して頭を一回まわして、前に重ねてライトにしたり、両耳にかけレシーバーにしたり、片手にトランシーバーを持って、気心の合ったもの同士、信号ごっこをしていましたが、トランシーバーをいくつも作って、私に一個手渡し、あちこちから送信してくるので、返答に大奮闘の一幕がありました。

M「こちら宇宙号からです。そちらどうぞ」



教「はい、こちら地球からですどうぞ」

M「はい、先生は、今、何をしていますか」

教「はい、先生は、Hくんのトランシーバーをつくる、お手伝いをしていますよ」

M「Hくんもできたら、あそびなっっていつてください」

教「はい、了解、そちら宇宙はきれいですか、何が見えますか」

M「はい、月や星やいっぱい、ものすごくきれいです」

教「はい、先生もいきいたいわ、H君といっしょにでかけますからね」

M「はい、はい」

この会話を聞いて、トランシーバーのでき上がった幼児から次々と送信されてきました。そうして、共通の興味を示してくる幼児たちによって、遊びは発展していき、長時間継続されました。

このように幼児の感情や思考の表現の手段に、ことばや動作を日々の活動の中で十分發揮することができるよう留意したいと思いました。そのためには、教師と幼児の感情的なコミュニケーションが十分に必要なことです。

### (3) 初歩的な創造活動の場を広める中で

予想していない事態がおこった。六月一週に入った日、ちょうど大時計の材料をと、ステレオのあき箱を部屋に置いて着色していたのですが、箱を立ててみて、

B「先生、これ僕らがいれるインディアンのかくれ家のように」と時計変じて、かくれ家となりましたので、私は、やしの木にと葉っぱをつけてやりますと、アワワワワの声にもぎやかに、たった一本の木の回りで喜んで出入りしている姿をみました。

B「先生、インディアンのレコードない」

教「ないのよ、ピアノではいけないかしら」

B「いや」

私は、即座に太鼓を与えますと、その場はそれで満足してくれましたが、こんな不用意なことで私は申しわけなく思いました。テレビのまんがレコード、リズム曲、フォークダンス曲、大体一学期に覚える歌など自由に使用できるようにしておりますが、今、幼児たちのほしい、インディアンの曲一枚がなかったのです。

それでも面ができ、お友だちも多く加わり役割なども、いくらかみられました。この時期によくみられる特色(つまり、自分のいいたいことや、したいことを一方的にいいながら遊ぶ)を教師はもっと、ふまえている姿勢がたいせつだと思いました。

また、同じ頃、美しいピンクと水色のリボンをみつつけて、手にまいたり、頭につけたりして、「かわいいポルカ」に合わせて、身体表現している数人の女児グループがみられた。

すると、幼児たちは、よく知っているもので、目新しいもの、

美しいものを発見すると自分たちも、きわつたり何か作つたりしている間に、うで時計を思いつき、数多くの時計ができました。

両うでにいくつもはめ、それでもなお作り、机上に並べて小さな店屋ができました。花時計だの置時計だのと、いくらか並べられると買ひ手がきます。

その時、自分の作った作品を手放さない幼児がみられました。

その幼児は、長時間かかつての力作で誰がみてもほしい時計です。お金をもつてくれば、売らないわけには、いかないし、困つた表情で、

A「いや、うらへんの」といって、だきかかえていました。

教「Aちゃん、ほしい時計があつたらかかつてきてもいいのよ」

A「あらへんも」

教「それじゃ、Aちゃんすばらしい時計、いくつも作つてあげてよ、時計づくりの名人ね」といいますと、ようやく手放してくれましたが、依然その品物を、うらめしそうな顔で追つていっています。反面、買い求めた幼児はままごとここの家に置いて喜んでいる姿があるわけです。

教「Aちゃん、お家を買われた時計は、たいせつにおいてありますよ、心配ないでしょ」といいますと、安心した表情で自作にとりかかっていました。自分が熱心につくつたものは、深い愛着が生まれるのは、だれしもですから、その気持を十分察して指導し

ていかなければ、その幼児のもつ創作的意欲を認めてやれないことになります。

#### (4) 自然発生的小グループを広める中

一学期も半ばを過ぎた頃より、自然発生的にできるグループが時々みられます。

(イ) お互いの気持が合う、仲よしグループ

(ロ) 消極的な幼児ばかりで刺激の少ないグループ

(ハ) 遊びの一致によつて、そのつど生まれるグループ

などいろいろありますが、特に、(イ)のグループは、なかなか他のグループと交流しない面がみられるのです。

六月も終り頃、この仲よしグループが、室内、廊下、ホールを結ぶ線路をチョークで描きはじめました。せまい園内は、たちまちの間に、白チョークの線路だらけになりました。

ちょうど、昨年度汽車ごっこに使用する材料のいっさいを入れた箱から、ぼうし、かばん、信号旗、切符など次々でてくるのを見て、一時は、どつと歓声をあげて喜んでくれたのですが、そのときは、まだ全部の汽車ごっこの遊具が、うまく使いこなせなかったのです。つまりまだ役割分化が、自分たちで話し合つて、できる段階ではないので、一応手にしたものの、縄電車と切符と、一人の運転手と、車掌だけで十分なのです。ですから、いま書いた線路の上を走る、走る列車グループと、切符を買うのが嬉しい、

切符の売り買いグループと二つに分かれてしまいました。

そこで私は、自分たちから発生したグループがどのような遊びを繰り返しているか、興味深く見守っていました。

すると、さきほど線かきをしていたリーダーのEが「ぼくら、

走ってばかりいると、つかれてくるから、いっぺんかわって」といって、他の友の行動を見て回っていました。しばらくして、

E「先生、切符買っても、その子ら、のらへんに」  
教「そう」

E「へんなの、どこ行き買ったの、名古屋行きだったら、あの車にのるのやに」

T「何、あれが名古屋行きてき」

S「うち、大阪行き買ったけど、汽車あらへんが」

E「そうやんか、だれかが作らなあかんの」と、そろそろリーダーの活躍が目立ちはじめました。

このように、その場その場で必要を感じ、二日ぐらい続けてしては、また別の遊びをしたり、思い出している汽車ごっこをするというように、断片的な遊びの発展から徐々に他人の存在を意識しました。創造的な活動の一面をみることできました。そこでこの遊びには、発展性があるから、ある程度ヒントを与えたり、役割など助言すれば、遊びの内容に計画性が生まれてくるかもしれないと予期して、意図的に小集団の構成や、その指導をした場合に

は、ある程度まで発展するかもしれないと考えましたが、現段階の幼児には、あえてそのようなことはしませんでした。それにしても、もっともたいせつなことは、このような、自然発生的なグループでのごっこ遊びを十分させてやることだと思っています。

#### (四) まとめ

一学期の指導において、もっともたいせつなことは、ひとりひとりの幼児の日々の活動において、満足した遊びをすることのできるようにしてやることであり、そのために、私どもは、最大の努力を払うべきでしょう。

すなわち、満足は、幼児のパーソナリティーの発達にとって、もっともたいせつなものであると思うからです。

つまり、幼児は幼児なりに、いろいろな満足を伴う活動を通して自分自身のパーソナリティーの欠陥を治療していくと思います。

そのためには、それぞれの活動の場面で、自由にのびのびと活動し、自己を発揮させてやるために、十分な遊び時間と、適切な環境とによって、安定感や満足感を得させることが必要であり、またその活動に調和と変化をもたせつつ、楽しく過ごさせるよう留意してやるべきだと思います。一学期をひとりひとりの幼児が十分に活動することにより、二学期の豊かな生活を期待したいと思います。

(四日市市立中部幼稚園)

## 四月・幼稚園の先生に望む

新庄 よしこ

新入園児を対象として述べてみましょう。新入園児を迎えるにあたって考えておかねばならないことがいろいろあります。中で最も大切なのは、生まれてはじめて親の手を離れて先生という人に世話をしてもらう、自分でできることから順々に実行していくようにしつけられる、いわば社会生活への第一歩にふみこむわけで、これは三歳児でも四歳児でも同じことがいえましよう。ここで先生は心の用意をしなければなりません。園児は多分不安を感じているであろう、今まで家庭内で自分为中心であったのはじめて一人としてあつかわれる、まわりには馴染のない友だちがおおぜいいるので、何をするにも心細さときみしさでついつい母と離れられない、どうしていいかわからなくて、ただただ泣いてしまう場合が多い、先生はこのようすを察して扱い方を用意しなければなりません。さてこれから実際の準備とか注意とかを述べてみましょう。

保育室が楽しい所、親しみやすい場所であるという感じを与えたい。殺風景でないよう、室全体を見まわして、ここここには花を、壁面または黒板には子どもむきの絵を描いて、その他簡素ながら幼児を迎える装飾をしておきます。

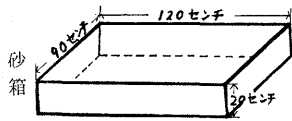
室にはいったら腰かけさせて、一人一人の名をよぶ、先生は私の名をちゃんと知っていて下さる、これで親近感をもつようになる大切な第一歩となります。名をよばれたら必ずハイと返事させる。内気な子はこのハイがなかなか口から出ない、はじめはいえない場合は強いしないで時をまつ、そのうち友だちのまねをして、適当にハイ、おはよう、さよならがだんだんはつきりと、いつの間にかすらすらいえるようになります。幼稚園では愛称は使わない方がいいと思います。

家庭票をよく調べておいて、めいめいの家庭の事情や環境を熟知しておく。この子は一人っ子、この子には生まれたての赤ちゃんがいる、祖父祖母、叔父叔母の近親者が同居している等々。これによってその子の家庭の中における位置、従って精神面の影響がはつきりしてくる。身体的にみて正常に出生しているか、遅れているか、既往症の如何はその子を知るのにごく根本となるので担任の先生は前以てよく知っておく必要があります。

便所はなかなか大事な場所です。第一に保育室に近い所にあるということ、清潔である、暗い感じのないことなど、慣れている我家のと違うのではじめはなかなか用がたせないでがまんしてつい失敗してしまう。ことに排便は影響が大きいので登園前にすませてくる習慣を親に話して、だんだんに慣れさせるのが大事であります。

クレオンや帳面を入れるめいめいの抽出しはみんな同じで区別がつきにくい、先生は幼児の親しみやすい可愛らしい動物とか花、飛行機などの絵を描き、切りぬいて抽出したので、ところに貼っておく、これで自分のはチューリップである、犬であると迷わず抽出しからほしい品を取り出すことができる。下駄箱にも同じ絵を貼っておくと自分ののがすぐわかるし、また迷ってもさがしあてるのが早いわけです。

砂場は新入児にとって遊びにはいれる最もよい場所です。道具を使って一人でも遊べるし、互いに友だち同士のふれあいもここからできはじめます。ところが年長児と同じ砂場であると体力の差があつて何となく近よりがたい、年長児にとつてもここは大切な遊び場でかなりここで発展する、従つて道具も大きく強くて発展性のあるものでないと物足りない。新入児はこの中にはいれない、はいつてもおもしろくない、そこで年少児のみが使うのを別につくつた。砂箱といつた方がいいかもしれない。五、六人が遊べるほどの大きさである。積木でも大型は無理で、初めは小型のみで遊ばせだんだんと大きいのが使えるようになります。登園の時間、ことにはじめは友だちより遅れたりすると劣等感が起こり、下駄箱でぐずぐずしたり親にしがみついたりする。こんなことは親の責任ともいえましよう。



その子のくせを知っておくのも大事です。新入の際に一応聞いておく方がいい。何かことがあつた時、先生がびっくりしたり、心配したりした場合、親はこの子にはこんな癖がありました、といわれたりして、初めに聞いておけばよいことの一つであります。母親はわが子を幼稚園に入れてみてはじめて知るいろいろのことがあります。泣くなんて思いもよらなかつた、うちでは誰とでも話ができたのに……その子中心に生活していたのが、おおぜいの中に入れてみると泣虫であつたり、引込思案であつたり、思いもよらない現実につづかる。母親はやつとわかつてどうしたらいいかと、このための勉強もしたり、人に聞いたりして、ようやく真の母の姿にたどりつくことになりました。以上区別も順序もなくとりあげてみました、幼児を受け入れる状態はきちんと区切ることはできません。幼児の心をそのままあらわしたことといえましよう。

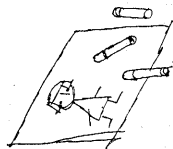
(大日坂幼稚園)

## 幼稚園の教師に望むもの

# 教師の創造性と幼児の創造性

(一)

飯 田 泰 造



創造という働きをただ、ものを作り出すことと考えるならば、鳥や昆虫でさえも秩序正しい巢をかけたたり、美しい形のものを作っているのを見る。しかしこれは自然への適応や陶汰はあっても、ただ親から受けついでものをそのままに繰り返しているに過ぎない体にくつついたことがらに属することであって、進歩も変革もないものであり、創造というに値しないであろう。

創造とは、進んで自らが新しい経験をすることをいっているのであって、人間の営みには、今日より明日とよりよい生活に進んでいく希望があり、進んでそれへの努力を払っていく姿がなければならぬ。そこに知恵をしばり、くふうをし、言葉を考え、さらに文字をつくり出したり、美しい数々の美術遺産を生み出したりして来た人間の文化が、不可能を可能にし、その生活をより豊かなものにして来たわけであるが、この過程を考えてみる時、創造の営みをそこに見出すのである。

そして高い文化が築かれた時代には、きっと豊かな創造性が保有されていたことを見て来た。

### ★創造性の教育と教師の位置

幼児の成長を見ると、そこには創造の働きがあり、人格形成として創造性の芽を引き出して培養していくことを考えていかねばならない。

このことはわが国においても戦中は「科学する心」とか「創意工夫」という合言葉で教育の中に考えられてはいたものの、幼児教育において創造性を培っていくことが、極めて大切であると叫ばれるようになったのは終戦後のことである。華々しい勢で拡がっていった創造主義の美術教育も、それぞれの時期においての大切な役割りを果たして来たことは事実であるが、幼児に全き創造性を来たらせるものとなったであろうか。

むしろ創造性ということが、切実に要求されるようになったの

はごく近年になって、科学技術のいちじるしい発展がもたらした才能開発の要請から来る教育問題として大きく浮かび上がって来たものではなからうかと考える。

それならば、今日の要求はただ感覚的芸術的創造性ばかりでなく、くふうや発明を来たらせる知的思考的創造性の芽を育てるものとして迎えられているように思う。

しかしながら幼児期をその発達の様相から考えてみると、これほど創造性の旺盛な時期はないのであって、しばしば「学校に入ると幼児時代のように想像の翼をつけて空を飛びまわることができなくなる」といわれているゆえんであり、だからこそ幼児教育の時期において、新しい時代に要求される創造的な人間像の土台をしっかりと築いておかねばならないとも考えられるのである。

しかし、幼児期は、絵を描いたり、ものを形づくったり、音楽リズムや劇のような芸術的創造的活動を、くふうしたり考え出したり発明発見などに至る知的創造活動とは分離されていない総合的な未分化な時期であって、それらすべての活動を活発にすること——実は子どもの遊びの中で豊富な経験をさせることと、それを創造的に方向づけていくことがこの要請に答える仕事だといえることができる。

さてこのことも、具体的な問題となってくると、いろいろな要素が考えられ、要素づけていく教師自身の創造性がきわめて大切な役割をもつことに行き当たる。

教師は教育という仕事の中で、子どもとどのようなかわりを持っているかを考え、その役割りと働きについて常に見つめてみることが大切であるが、創造性ということでは考えるならば、教師が保育を創造しているか、ということであろう。

それはどのようなことか。

★子どもとともに自らを高めていくこと

まず、子どもの創造性を認識し、尊重することが挙げられる。このことは、子どもは教師があまりに熱心になり過ぎて子どもを引っぱっていかうとするやむしろ反対に創造的な活動の軌道をはずれてしまうこともあるので、教師は子どもをじっくり見つめると同時に、ともに創造的でありたいということである。それは子どもほど創造性の盛なものはないのであって、しばしば教師は子どもから教えられるものである。教師は子どもとともに進んでいかねばならないことになる。

確かに教師はいつも一歩高い所から子どもを俯瞰している心がけは必要であろう（観察し、洞察し、科学する）。適時称賛を与えたり、できるだけ目につかない方法で子どもの遊びを組織していったらねばならない。しかし同時に、子どもの目より高い所に構えているのでなく、子どもと同じ目の高さに位置して見ることが大切である。ということは、子どもの視野でものを見、子どもとともに生きてみるということ、子どもと一緒に驚いたり、疑問をもったり、また発見してみようとするものが大

切である。しかしそれは決してレベルを下げるということではない。教師は常に自分を磨いていかねばならない。ここ数年の間、幼稚園の教師の不足が、教師の質的低下を来たらせているむきもあつた。教師自身高まつていこうとする努力が不足していたようにも思う（これは教師養成や、社会問題もからんでいよう）。創造性においても当然高まつていかねばなるまい。それは一人一人に適したものがあろう。それを見出して磨いていく努力が必要であるように思う。

絵についていうならば、かつて「教師は絵は描けなくともよい、子どもの心を知り、遊べればよい、指導にあたっては、描けることがかえて災いとなる」というように教えられたむきもあつたが、それも確かに一理ある言ではあるが、これをとりでにして教師が絵を描いてみようとする心も、その創造の喜びも楽しみもまた努力することの快感をも捨て去ってしまったのでは、到底子どもとともに生き、創造を味わうことはできないであらう。

音楽もそうであらう。決してピアノがよく弾けるとか、歌がじょうずにうたえるということに限らずに、音楽を心から楽しみ得る者でなければ、子どもとともに音楽を創造的に味わうことができず、適格ではないであらう。

子どもの、また教師の身のまわりにある素材は限りのない拡がりを持っているのに、われわれの目が狭くなっていることはないであらうか。それを精進して見出す努力をし、そこに喜びを感じ

とつてより創造的な生活を営む者となつていきたいものである。そこで一つ考えられることは……。

#### ★タレントということ

である。確かに天分を持った者はある。それはとても素晴らしいことであり、たまたものには違いない。教師の天分が子どもによい影響を与えていくことは考えられる。しかしそれならばそのような者でなければ教師としての資質に欠けるであらうか？……私はこのように思う。むしろ一人一人は「自分はどのようなたまたものを持ち合わせていない、だから高まつていこうと努力し向上していく……その努力する心構えが子どもに伝わっていくことが大きいのではなからうか」と。

だから物ごとを不思議だと思つてみる心を習慣づけていくとか、ぼんやり見ていないで、そこいらにも素晴らしいものや、あるいは美しいものがひそんでいることを見出そうと努めてみる……教師がそのような心がけを持ち続けていくことが、幼児の創造性の芽を培つていく大切な素地となるのではなからうかと考へる。

また、しばしば幼児教育において大切な環境設定について考えてみるならば、そこで教師は大いに保育に創造性をもりこむことが可能である。

創造性を教育したいという願ひは、実は教えることのできないものであつて、子どもの心の中に自発的に育つていくものなので



あるから、十分芽の出やすい環境を設定しておいてやるのが極めて大切なことに違いない。

そこでの教師の役目はとても大きい。

創造的な環境の設定が切にのぞまれる。それはどのようなことであるか。

教師自身にしても自分に最も適した創造性を高めていくことのできる(領域)が考えられるであろう。子どもの創造性を高めていくことができるのは、(たとえば)「絵画製作」と決めてかかる必要はないのであって、それ(絵画製作)によつて、ものぞめるといふものであろう。銘々が主体的にそれを見つけ、高めていく努力をしなければならない。

★創造は模倣をのりこえて……

先日ある音楽リズムの先達と教諭たちとの話し合いの時に、一教諭が「子どもの前に立つて先生がリズム表現をして見せることは、子どもがそれを模倣し、そこからパターンができてしまうのが心配でやることを躊躇してしまふ。そうかといって、やらないうと子どもが動き出さない」という発言をした。これに対してその先達が「それはその先生自身が音楽をほんとうに楽しんでいない、自信をもって確固たる態度で自分が音楽の中に溶け込んで表現をしているならば模倣に終わるような心配はいらない」という言葉を聞いた。ほんとうにそうだと思ひ、そこに創造の姿を見るのである。

教師は常に子どもと一緒に創造をし、ひらたい言葉でいうならば、夢を持って生きていたいものである。しかしそこには努力も勇気も必要とされる。また、タイミングをとらえるということもとても大切なことである。きつかけをはずしてしまうと折角の創造的な発想や動作もそれが創造的なものとして伝わっていないことがある。驚ろきや疑問や発見があつたら、教師もタイミングよくそれを捉えてそこから表現にすすめていこう。それは緻密に、誠実に。そして表現することによつてまた新たな発見や驚ろきを来たすと考えられる。

そしてこの場合にも教師は動機づけに大きな役割りを果たすものである。

教師は子どもを連想に導いていくことによつて、子どもの心の中のイメージを浮かび上がらせ、拡げていけるであろう。それはいろいろな方法が考えられる。

「絵をつくり出すものは何か……それはあらゆるものが詩になる時だ」とイギリスの女流美術教育の先達マリアン・リチャードソンはいつている。(『愛の美術教師』)

そこではリチャードソンは「私たちは美を狩り出しに行く、そこで私たちは歌になるような調和のとれた形を見つけて家に帰る……そして詩をもって描写を与え、彼らの思いついたままを描かせた」といつて教師たちが詩人であることを奨めて<sup>す</sup>いるが、ここにも一つの<sup>す</sup>だてを見出すことができる。

教師は詩人であり、芸術家でもあり、また、科学者であらねばならない。

詩人とは、うっかりすると見過してしまふようなものの中にも調和や統一や秩序を見出して最も簡潔なことばでそれをうたい上げていく者であろう。

芸術家とは平凡なものの中にも美を見つけ出していく者であろう。

科学者とはニュートンのように何でもないリンゴの落下にも目をとめて、その中に宇宙の真理を見ぬこうと努力しているのであって、それは別個にとりたてていう人（や職業）ではなく、実は自分自身であると知らねばならない。

こうした創造的な教師の生き方や心構えが、子どもが創造的に育っていく一つの方途であって、保育を創造していく者の構えではなからうかと考える。

#### ★保育を創造する教師会に……

もう一つ加えておきたいことは、幼稚園は大よその場合、数人の教師によって構成されている。つまり教師会を持っているが、この教師会が創造的であるかどうかはその幼稚園の創造性の活動源となるのではないだろうかということである。

もちろん上述のように個々の教師が創造的であることはまず大切であるが、教師会が創造的であることがもう一つの重要な力となる。

教師は保育を任せられ担当しているから保育室では一城の主でいろいろなことを考え、実践しているのに、教師会となると依存的態度の寄り集まりとなったり、一部の権威に盲目的であったり、よりかかる空気が出て来たりすることは戒めなければならない。

互いに保育室で出てくる問題を出しあい、ぶつけ合って更に創造的、建設的な意見を出しあってこそしっかりと保育が創造されるであろう。

そこでは努めて自分を表現する努力を積んでいくべきであるとともに、他の意見を傾聴し、ほんとうに教師会が話しあいの場となる時、教師の相互が次第にきたえられていくであろう。

教師が一人一人の子どもを正しくみつめて捉え、ねらいをしっかり立てて保育をし、それを評価する―実は自分の仕事を反省する態度が確立された時、創造性も高められていくのでなからうか。

教師の一人一人は教育の主体なのだから、とかくリーダーの影により沿ってその命令に従ってやっていく安易な行き方を極力排して、まずは自らが保育を創造していく意気込みを持ちたいものである。

教師会がそのような相互の高まりのための場となるために互いに影響を与えあいつつ、自分たちに与えられている課題に直面し、それに取り組んでいける者となるように励まし合い、助言しあうよう努めることも大切なことと思われるのである。

## 現代の母親と教師

< 1 >

### 「育ての心」をめぐって

—ある母親たちの読書会より—



森 田 良 子

あるお母さんから先日こんな手紙が来た。

「略——『先生育てていくことはどうということなのか。その本の元があるはずです』と問いつめた自分の姿がなつかしく思い出されます。今年も最後の読書会で、倉橋惣三選集を手にし、やっとさがしてめぐり会えた人のようで、よかつたなあと心から思っております。子どもの中から窓を開かれるこの本は、私自身一筋の道となつてまっすぐにのびはじめております。倉橋先生の生きていかれる人生の目を通じて子どもの世界をこれほどにいろあたたかくそしてきびしく、えがき出されていることに胸をうつものがございます——略——」

月に一度集まってくる母親たち数十名のグループの一人からのもので、四年越しにもなるので、彼女たちは大分いろいろの本を

読んで来た。教育心理学も半年以上もかかって勉強したり、松原治郎先生の現代の家族、猪飼道夫先生の日本人の体力、松田道雄先生の本、その他等々、非常に意欲的なこのお母さまたちのふん囲気にいつも押され気味の迫力をさえ感じていたが今年の倉橋先生の「育ての心」がテーマであったここ十か月ほどは、彼女たちの今までの勉強の良い意味での総まとめであったように思われる。先生のまたあの美しい名文をひきつけられるように感激して読んでいたお母さんたちの姿が目の前に浮かぶ。彼女たちはあの中から倉橋先生の生き方を学びとつたからであろう。そして、こういう生き方、教育の方向は、現代の母親に、教師は、もう一度改めて考え直すよう迫られていることであろう。

昭和二十年十月再刊された折の序文の終りに、『この書の内容

が時に即しての所論所説ではなく、育つものへの久遠の信仰による光明の伝達に他ならぬからである。』と書かれていることはば意味深いことと思う。

敗戦の年の秋に再刊されたこの本の序文

『国敗れて、いちばん気の毒なのは子どもである。が、またいちばん希望をもたせるのも子どもである。濟まんねといった心苦しさと、たのみますといった頼もしさと、それが一つにこみあげて来る心もちで、じっと見まもりもし、抱きあげたくもなる』

あれから二十年たつて、先生は他界された今、経済は成長し、物質的には豊かな生活を樂しむ世の中に復興した。けれど子どもたちの育ちゆく場、教育の場は果たして恵まれているだろうか。青少年不良化の大きな波、精神的支柱を失った若者、先生のあの序文には、なお、

『わたしたちおとながどんな急転回に困迷することであろうとも、幼きもの、行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ。わたしたちは決してそれを怠ってはならぬ。』

静かに考えてみると、先生の憂えておられたようなことが、型をかえて、今の教育の場に、子どもたちの小学校に、中学校に、そして社会にみちているのではないか。

金に引き回されて、デリケートな子どもたちの心の肌など問題にしないテレビのコマーシャル等々、物質優先の軟弱ムードは子どもたちをブレイキもハンドルもきかない、やしのようの子にしてしまう。子どもを生むよりマイカーをなどと、少人数の子どもの家庭がふえ、わがままで気力のない子ができてきたり、さまざまである。

それよりもっと心の痛むのは教育の場で、先日もある熱心な校長先生から「この青少年の危機を何とか救うことはできないのか……」という趣旨の手紙をいただいた。多くの校長先生が自分たちの姿勢の七割を教育委員会にむけ三割を学校へむけているというようなことは、現実なのかもしれない。意欲ある教師は、だんだんに情熱を失いサラリーマン化してしまう。一般の子どもたちの救われない子が数多くできてくる。問題児、非行少年が多くなる。

倉橋先生が今この世に存せば、どんなに心を痛められることであろう。困迷することであろうとも、幼きものの行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ、先生は決してそれを怠ってはならぬと書いておられる。先生のお心を心として、残る者は働かねばならぬと母親たちと共に強く思ったことだった。そして次代を負う子どもたちのため一人一人がよい母親になって、頼みますよと無限の願いをこめて、見まもっていきたくいと話し合った。

この先生の名著「育ての心」の中で母親たちが感銘したのは、何といつても、先生が「幼児の教育」にのせられた数々の巻頭言であろう。この美しい、芸術的な名文は一つ一つお母さんたちの心奥深く吸いこまれていったと思う。

ここに共に学んだいくつかをあげて、現代の教育、母親と教師の問題等を考えてみたいと思う。

## 一、にじみ出る真実性

『あなたのもつていられる貴いもの、美しいもの、賢いものを、みんなそのままに受ける力は子どもにはない。その意味で、折角のあなたの感化も彼らに及ばないものが多いかもしれない。そのまた逆は、あなたのもつている欠点をも、彼らの前にある程度までは隠し、つくろうことができるかも知れない。素より意識してそうするわけではないが、そういうことで、済む場合も少なくあるまい。』

ただ一つあなたのもつ真実性、あなたの性格の底からにじみ出る真実性だけは、どんな幼い子どもにも届かずにはいない。方法でもなく術でもなく、ある日、ある時、ふとにじみ出るあなたの真実性こそは、幼い子どもの中に、強い深い感化を与えずにいない。その逆にもし、あなたに真実性が欠けている時は、それがまたそのままに、幼い子どもの心を

不真実にせずには已まないであろう』

おそらく教師たちに対していわれたことばと思うが、およそ教育に携わる者として誰でも持つていなければならぬ原則的で素朴なこのことが、今の日本の教育界にはなされていない場合が多くあった。教師のサラリーマン化など、さらおそろしい気がする。この母親のグループに属する大学生の子どものリーダーがこんなことを書いていた。

「——略——さて皆さん本来教育という人間の営みには——もしそれが可能なものであるならば——かなり長いじみな努力を要するものと私たちは考えられ、相互の新しい何ものかをそこに作り出していくという人間の作業が、そんなインスタントなしるしや効果をあらわすはずはありませんから。私たちは与うべきよりむしろ、自身、得るべき存在なのかもしれませんが、ともかくも、何らかの願いをこめて彼ら二人（今年のこのグループの卒業生のこと）と接して来たと思えます。そして彼らと私たちの関係の中に幾分なりとも、およそ広い意味での人間的な真実があり、もしそれが二人の中に小さな足跡をのこしたとしたら、五年たち十年たったいつか、思いがけないような収穫を彼ら自身がまた、われわれ自身が得るかも知れません。そして『願い』とはほかでもない、彼らが一個の人間としてたくましく豊かなものであつて欲しいということに他なりません。——後略——」

倉橋先生のいわれる「方法でも術でもなく、或る日、或る時、ふとにじみ出るあなたの真実性こそは、幼ないものの心に強い深い感化を与えずにいない」そしてこの若い学生は、かつて小学校の折、情熱と真実のかたまりのような若い男の先生に受け持たれ、幸いなよき思い出を持っている人であった。

## 二、ほいほい子問題

この頃、PTAの会合でも、またテレビや新聞紙上でも保護過剰の子のことが問題となる。倉橋先生はこんな懇切丁寧な、何十年も前に忠告していらっしやる、が先生もまさかこんな時代になるとはご想像つかなかったかもしれない。母親たちは、「一つ一つが思い当たることばかり、痛いご忠告です」と話していた。物の豊富な時代になったこと、家庭の中の同胞数が非常に減ったこと、原因はさまざまあるが、困った問題である。

『ほいほい子の受ける害は独立心のできないことである。一から十まで人の世話になって、お乳母日傘で大きくなる子に、独立立というような強い力が出るはずはない。すべて精神の発達は「やってみること」「自分で失敗して見ること」からできてゆく。やってみないで何の自信が出よう。失敗して見ないで何の経験が積まれよう。——中略——人手を借りなければ何一つできぬ依頼心ばかりで、奮発のない意気地なしは、

ほいほい子からできるのである。そしてこういう独立心のないものは、一生ほいほいされて居れば兎も角、山坂険しい世の中へ出ては、心棒のない車、舵のない船、坂から転がり落ちるか、波の間に漂うの他はない。我が子に財産を残してやることもいいかも知れない。我が子に学問をさせて置いてやることは尚更いい。併し我が子に独立心を養って置いてやる程大切なことはない。ただ目の前に安楽を与えて、この独立心を与えない程我が子のために実に不親切なことではない。

人は自分のために、寄ってたかつて世話してくれるもの。自分は人に命令し使役しておればいいもの。これがあたりまえだという風の考えは、ほいほい子には当然起こる。我がまま育ちに同情心が薄いと、昔からいうことだが、この同情心のない人間というものは、傍目（かたがら）にも憎たらしいものであるし、世の中へ出ても碌なことではない。その子可愛さで盲目になっておる親には兎に角、そうでないものには爪はじきされて、社交の上に人望の徳望のこととはとても受けられない。本人も次第にそれに気がつかぬではないが、併し、気がついたとて幼時からの習慣は一寸抜け難い。又心の底から他人を尊敬し、人を人らしく思うということのない者が、いくらお形式につめたとして人望のつくわけのものではない。それも初めから低く小さく慣れたものならばいいが、ほいほい育

ちに限って、人からは崇め尊んで貰いたい。人を人とも思わないで、自分を自分とのみ思っている。往々にして世間に見る一人よがりのいやな人間というものはたいていこのほいほい子からできるのである』

倉橋先生は昭和四十三年の現代を見透してこれを書かれたわけではなく、いつの世にもこんな子はいるのだが、この頃程、この文章の母親たちにひびく時代もあるまいと思う。総てにイージ、享楽ムード、子どもの数は少ない、こんなのであつちを見てもこつちを見てもほいほい子である。そして中流家庭以上に問題の子、あるいは非行少年が多くなっている、現代の母親また教師の最も心すべき問題である。

### 三、母の誕生、母の成長

この個所はまたお母さんたちがもっとも、うなづいておられたところかと思う。

『先ず以て第一のおよろこびがお子さんの初の御誕生であることは申すまでもありません。しかし其の上にもう一つお祝い申上げたいのは、あなたが新しく母になられたお喜びです。

——略——どんな子福者の場合でも同じである。その子その子の母としては、その子の誕生のたんびにそのたんびたんび新しく生まれるのである。兄の母では前からあつても弟の母

としては弟が生まれた時に初めてなる。つまり、どの子の母もその子の誕生と共に誕生するのである。成長するのは子供りではない。母も日に月に年に成長する。

ところで母はどうして成長することができるのであろうか。子の成長が母の愛育によるのはいうまでもない。母の愛育がなくては子の理想的成長は得難い。つまり子は母のお蔭で成長するのである。これに答えて、母の修養が説かれる。もとより結構である。また母の学問が勧められる。もとより必要である。それは皆、母を立派な母にする大切な途であるに相違ない。しかし母そのものを真に成長させるものは、何が何よりわが子である。わが子を愛育することである。つまり母は子のお蔭で成長するのである。——略——さて子があつてもわが子を自ら育てなければ親として育たないのである。子を育てる母の苦勞、母のよろこび、それを自ら体験しなくては、母としての成長は遂げられないのである』

「あの方はお子さんができたら変わりましたね」とはよく聞くことばで、倉橋先生のおことば通り、子を持つことによつて母は成長する。お子さんを持つたびに地面に根を下ろしていくといった感じがする。落ちていく、安定してくる。根が二本になり三本になるといよいよ安定して、また成長してくる。そうしているも感じることは、子どもの数になるだけ多いほど、いいなあと

しみじみ思うことである。

このグループのリーダーの学生がいう「素適な子だなあと思うとお母さんが安定しているね。僕も○ちゃんのお母さんのようなお嫁さんをもらおう」全くその通りで、安定しているお母さんの子はすくすくと伸びている。

それとこの先生の文章から考えさせられる一つの話は、幼い子はやはりお母さんが育てて欲しいと思うことである。先日小児科のある大病院の部長先生がおっしゃっていただけ「この頃は乳児幼児を保育所へマイカーで預けに行つて仕事に出るお母さんがいる。世間一般の風潮になつてきた。子どもをたくさん扱つて来た私たちとしては、やはり反対で、少なくとも三つまではお母さんが育てて欲しい、経済的に少々苦しくとも、あとでとりかえしのつかない子になる」私も同感ですと申し上げた。どんなにベテランの保母さんがいて下さつても、その子ならではの味わいのある子はお母さんの素適なところをうけついでいる子で、それは、やはり事細かな毎日の生活であらうと思う。

#### 四、まむき よこ顔 うしろ姿

倉橋先生の有名なおことはなのかもしれない。改めてまた皆と読んだことだが、余りにまむきな今の教育ママたちに尊いご忠言である。

お母さんたちは例のごとく小言をうるさくいう前に、自分を反省し、自分を豊かにすることを考えた。ある母親曰く「子どもの教育なんて親だということ、わかつていてわからなかったのですが、本当はまむき、よこ顔、うしろ姿がわかつて来たら、子どもの方が変わつて来ました。不思議なことです」と、幼い子は二十四時間お母さんと一緒に暮らしていることを忘れないようにしたい。

「育ての心」から何度読んでも尽きないものを私どもは与えられた。もっとたくさんのお母さんたちの間に、こういう本が読まれたらと思わずにいられない。結婚祝いにしたいからわけて欲しいとおっしゃつた方も何人かあつたほど、この読書会は成功だった。教育には技術もまた大切なこと、そういう面に有能であることはもちろん必要である。倉橋先生を科学的でないと評されている方がおられるが、果たしてその科学的という教育が、ここ数十年子どもたちをどう導いて来たか。本当の意味の科学的というのはやはり倉橋先生のおっしゃるようなことなのではないか。今の教育の場に、家庭に、社会に、倉橋先生のような子どもに対する姿勢が欠けているのではあるまいか。現代の日本人はそんな感覚がなくなつて来たのではないか。

あるお母さんが、「先生、教育とは母親の、教師の人生観です  
ね」といった。

(小児科医)



# 保育者養成のための教材



南 信 子

教育用辞典によると「教材とは教育の目的を達するために形づくられた教育の内容をいう」とある。また、教材はカリキュラムを構成する素材であるともいわれる。「保育者養成のための教材」について考える時、まず保育者の定義を明らかにし、その養成の目的、内容、方法について体系的に理論づけることがなされていなければならないと思う。その上ではじめてこの問題について論ずることができるのである。

しかし紙面の都合上、それらの多くの問題について十分ふれることができないので、できるだけ標題にかかわりのある問題点について考察しながら論をすすめたい。

保育者とはもちろん幼児教育についての専門家であり、教育者であるといつてきしつかえないと思う。どんな保育者を養成する

かということについては、人によってさまざまの意見のあるところであろう。また、現代の社会が現実要求している保育者像もさまざまであり、これを必ずしも理想的であるとはいえない。これらの現実の問題をとらえることはもちろん大切であるが、それと同時に、次の時代に生きる幼児の教育はいかにあるべきか、その望ましい姿を、次の時代の理想の追求とともに考察しなければならぬのである。今日の幼児教育は二十一世紀に活躍する人々を育てるのである。ゆえに現代の社会に生きながらも次の時代の望ましい姿をえがきつつ、確信をもって幼児教育の問題を考える社会的視野をもった保育者が期待されるといえよう。それではこうした保育者養成の計画はどのように展開されるべきであろう。一つは保育者として望ましい人格の形成であるといつてよい。

それは人間の資質の問題であるともいえるが、また一面それは教育によって保育者を志すものが自覚を促されて自ら成長する過程であるといえよう。筆者はある地方で、国公私立の幼稚園の園長に対して出された「望ましい現場の教師」についてのアンケートの結果を知る機会が与えられたが、現場の保育者が要求している保育者像は必ずしも望ましいとは思えないことを痛感した。それはどこに原因があるのか、幼稚園教育の目的、あり方に対する考への相違からくるのかもしれないと思うが、非常に近視眼的、外面的な要求や期待も多いことを思う。

たとえば「地味であり目立たないが、服装にも色調にもセンスのよき細心の心づかいが見られる」「言葉使いがていねいで礼儀正しい」「人からの注意は喜んで受け入れる」など、また単に「健康で明朗な人」とか「円満な人格」などが期待される場合が多いが、これらはもちろん保育者でなくても人間として必要な徳性であるといえよう。保育者は保育者である前に一人の人間として人格の成熟をめざし、たゆまぬ精進をつづける人でなければならぬと思う。そこで保育者養成を単なる職業教育と考えるのではなく、広い人間形成の場として考えることが望ましいのではないかとと思う。

特に幼児教育においてはその教育の人格形成に果たす役割が最

も重要な点であるので、保育者自身もいかにして人間の人格が成熟していくかという問題については自分の問題として考えることが大切なのである。人格は人格とのふれあいのなかで形成されるといえよう。保育者を志すものが、多くのすぐれた教授たちによってその学問を通してその人格にふれ、自らめざめ、自分を成長させ、保育者としての使命感と確信をもつことが大切である。

哲学、文学、宗教などの学問を通して、人間の生きることに対する思索なくして、人の教育にたずさわる叡智は与えられないであろう。また近代科学の進歩にともなって急変する現代の社会、世界の動きをしっかりとみつめ、時代の要求を知り、次の時代についての幻を与えられずして二十一世紀に生きる人を育てる確信は生まれてこないのではなからうか。ここに保育者養成の大学がめざす人文科学、社会科学、自然科学など、一般教養の学問の重要性があると思う。

第二には、幼児教育の専門家である保育者の養成における幼児教育の理論を扱う学課程の重要性である。教育学を基礎として保育学を中心に、保育内容の領域が理論的に統一されることが大切である。保育界にはとかく教育技術を重んずる風潮があるが、理論の確立が先決であることを思う。保育者は古今東西の教育に関する学説を理解し、その教育の歴史に対する深い洞察がなければ

ならない。また保育原理は心理学や、精神衛生、小児衛生学などと横のつながりをもちつつ、現実の幼児と結びつかなければならぬといえよう。そこに実習の必要性がおこってくる。

実習は教職課程の一教科というよりもあらゆる学問の総合的実践の場をもつものである。実習によって直接に対象である幼児に接し、幼児に対する理解を深めていくが、二か年の保育者養成機関では十分にこのための時間をとることが困難である。最近これを補うために、また実習を効果的にするために視聴覚教材が多く用いられるようになってきた。

この方面の研究は先進国ではすでに十数年前より研究されており、アメリカ、オハイオ州立大学教授エドガー・デール教授による視聴覚的方法はよく人の知るところである。特に幼児の発達を理解のために、スライド、ハミリ、十六ミリ、ビデオコーダー、写真などを用いることが非常に学習に効果的であることを、筆者は米国留学中にしばしば経験した。最近日本にも非常にすぐれたものができてきたことは喜ばしいことであるが、これらの制作にあたって今後さらに研究しなければならないし、特に保育の専門家の指導によるものが多く生まれてこなければならないと思う。そのため保育者養成機関の協力研究が必要なのでなかろうか。

なお実習に視聴覚教材フィルムを利用する一例をあげてみる

と、実習の前に各年齢の発達段階のフィルムを見ると観察を補うことができるし、幼児が集団生活に適応していく状態をフィルムで見ることによって、時間的に過去、現在、将来の予測を同時点において観察でき効果的である。幼児の問題行動などもその実態を把握することができ、保育の方法などについては客観的に評価する材料を提供してくれる。以上はほんの一例であるが、心理学、保育理論などの関連において、また観察、実習と平行してこれらの教材を利用することによって効果をあげることができる。また幼児の観察のために付属幼児教育施設に観察室を設け、そのために必要な設備を整え、絶えず幼児に関する研究をなし保育者養成に役立てるとよい。

第三に保育者養成の必修課程に保育内容の研究がある。文部省は幼稚園教育における保育内容として、音楽リズム、絵画製作、自然、言語、社会、健康の六領域をあげているが、いずれも幼児の成長発達および幼児の現実の生活に結びついた経験であるといえる。これらの経験を通して望ましい人格の形成をめざすのであるが、特に、健康、言語、社会の領域は幼児の成長発達と現在および将来の健康安全で幸福な生活のために必要な内容であり、音楽リズム、絵画製作、自然の領域は幼児の成長発達の途上にあらわれる創造性や科学性の芽生えと直結し、しかもこれらは人類が今

日まで受けついできた文化の遺産でもあるわけである。もちろん幼児教育においては教材そのものを与えることが目的ではない。

数多くの文化財のうちより幼児の成長発達に即したものを精選して与え、それらを通して現在及び将来に生きる人格形成に役立つようとするものである。それらを媒体として豊かな人間性を培うことがねらいである。ゆえに保育者養成にあたってはこれらの領域に関する広い知識と、技術を伴った豊かな教養が必要であるといえよう。そこで次にその領域のひとつにふれてみたい。

### 音楽リズム

幼児のための音楽リズムはそれを通して創作的表現に対する興味を養うことをねらいとするが、保育者として幼児のうちに潜在する音楽性をひき出すためには保育者自身の音楽に対する関心とある程度の教養、技術が必要であり、保育者は、真に音楽を愛好し、よい音楽を鑑賞、選択する能力をそなえていることが望ましい。また自らの感動を音楽にあらわすことができればこの上ないが、せめて子どもが自然にうたい出すメロディーを音楽として作曲再現して与えることができると、子どもとともに音楽を楽しむことができるのではなからうか。

いずれにせよ保育実践の場に必要なる楽器を弾く能力や、幼児に望ましい音楽的経験、たとえば、歌唱、リズム的活動、音楽鑑

賞、楽器の使用などのために必要な技術を十分訓練することが大切である。こうした技術を軽んずることがないように指導しなければならぬと思う。また幼児の音楽的発達や興味に対する知識を十分にもち、最近の氾濫する音楽的環境、教材の中にあつて、真に音楽性の高いものを選択して与えなければならぬのである。

### 絵画製作

幼児のための絵画製作は音楽と同じく創作的表現に対する興味を養うことをねらいとしているが、保育者自身が美術に対して深い関心をもち、古今東西の名作に深い感動をもつように指導されることが大切である。また一方保育者として幼児の描画活動、造形活動を理解し、その発達段階に対する研究がなされていなければならぬ。幼児の画や制作したものをいかに見るべきか、その望ましい指導について確信をもつことが大切なのである。また幼児とともに自ら描き制作することに喜びをもつことができるならば幸いである。また保育実践の場において、幼児に必要な絵画製作の材料に十分親しみ、その使用法などに熟練することが大切であらう。

ポスターカラー、フィンガーペイント、ブレイドワ、ねんど、石膏、木工道具、その他あらゆる幼児の造形活動を活発にする教

材の選択とその指導に堪能でなければならぬ。

## 自然

自然観察は日本の幼稚園教育においては早くより保育項目のなかに取り入れられてきたが、この領域は自然科学の初歩に関する知識を与えるというよりも、幼児をとりまく自然の事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うことがねらいである。自然は人間の人生に深いかかわりをもち、いわず語らずのうちにも多くのことを教えている。すなわち自然界はそのまま豊かな教材を提供しているのである。ゆえに保育実践の場においては、単に自然についての知識を与えるだけでなく、自然に深い関心と愛情をもち、さらに畏敬の心をもつように指導することが大切である。また日常生活の中で科学的な態度が養われるように、広い心で正しく物事を観察し、常に原因と結果を追求しようとする心を育てるようしなければならぬ。

## 言語

言語発達の著しい幼児期の言語指導の責任をもつ保育者には多くの課題があるように思う。幼児の聞く力、話す力を育てることが重要な保育者の役割であり、生活の中で彼らがのびのびと言葉によって自分の意志や感情を現わし、他人の話を落ち着いて正確に聞くことができるように指導しなければならないが、そのため

にはそれぞれの段階における言語発達に細心の心づかいが必要であろう。また保育者自身の言語生活に絶えず検討が加えられなければならないと思う。保育者は自分自身の音声や、言語の用い方について、テープレコーダーなどを用いて訓練することが望ましい。

また児童文学に関する十分な知識をもち、文学が人間の人格形成に果たす役割の重要性を認識することが大切である。最近絵話、紙芝居、ペープサート、人形芝居などの教材を通して童話を与えることが非常に多いが、それらがその童話の文学性を破壊したり、単に娯楽化してしまわないように注意することが大切である。また数多い童話、詩、絵本の中から文学的な香りの高いものを選択し、発達や年齢に応じて与えることができ、幼い日によい文学への愛情を育てるようしなければならない。

## 社会

保育内容の「社会」では、幼児の社会性を育てることおよび社会の事象に関する正しい理解と態度の芽生えを養うことがねらいとされている。これらの指導のためには保育者自身が望ましい人生観、社会観、世界観をもっていることが先決であり、さらに幼児の社会性の発達について正しい理解をもって確信のある指導がなされなければならないと思う。また社会の事象に関心をもたせ

るために、対象である幼児の実態に即して適当な教材を提供することが大切であるが、社会機能を理解させるための幼児向きの教材が非常に少ないので、今後もっと研究がなされなければならないと思う。

## 健康

健康の領域を指導するためには、個人の基本的習慣の形成、健康管理、学校保健、小児病学、栄養学など広い範囲の知識が必要であり、さらに体育に関する指導をするに必要な技術も修得しなければならぬ。また遊具に関する知識としてそれらの価値や指導の方法などに熟達していなければならないし、幼児の身体の発達、運動能力について十分な知識をもっていることが大切である。

以上保育内容の研究に必要な具体的な内容について述べたが、一般的に幼児期は言葉のみによる概念的理解は困難であり、感覚を通して具体的直接的経験により物事を学ぶので最近では視聴覚教材を用いることが非常に盛んである。

その種類は多種多様で、幼稚園教育の花形の観がある。たとえば最もよく用いられるものに、絵本、紙芝居、人形芝居、幻燈、映画、テレビ、写真絵、レコード、テープレコーダーなどがあり、その他、黒板、ボールド、地図、ポスター、模型や演示、劇化、見学なども盛んに取り入れられてきた。保育者はこれらに

いて、その目的と用い方、その教育的価値について深い理解をもつと同時におちいりやすい欠点に留意しなければならない。どこまでもこうした教材は教育を効果的にする手段であって、教育そのものではないことを忘れてはならない。

以上保育者養成のための教育の内容として、その人格形成の問題と幼児教育の専門家としての理論の確立および保育実践の場における保育内容の領域研究の問題にふれて考えてきたが、教材はその養成機関の保育者養成の理念によって相違があらわれることは当然である。ゆえに教材の選択にはまず保育者養成の使命と目的の確立がなければならないのである。また教材には伝達すべき価値としての人類の遺産が正しく含まれているはずであり、また時代の社会的要求と学生の個々の生活と経験、能力、興味などへの配慮がこめられていなければならない。

保育者養成が画一化した人材を保育界に送り出すのではなく、保育者を志すものの主体的な研究や活動をよびおこすことができるような教材とその方法が必要なのである。その教育が目的を達成するか否かは、すべてその教材の選択とそれを指導するものの人格と能力にかかっているといえるのではなからうか。

## 幼稚園管理と教師の創造性

# 教師の創造性を伸ばす幼稚園経営の実践

高橋 系 吾



幼稚園の管理は園の教育目的を効果的に実現させるための運営

であって、「幼稚園の目的達成に必要な諸条件を整備し、施設を維持運用する機能」であるといえることができる。

現在の幼稚園管理に欠けているものは教師の創造性である。

幼稚園管理の内容を考えると次の分野になる。

- 人事管理……協力、適材、適所
- 事務管理……単純、能率、責任
- 施設管理……創意工夫、細心
- 経営管理……合理化

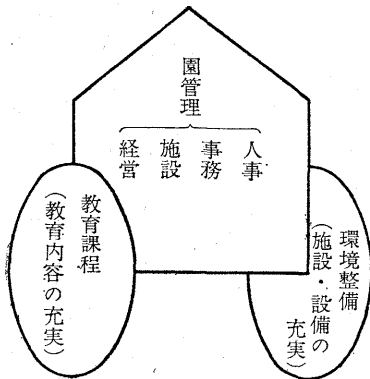
幼稚園の運営を車にたとえると、その両輪の一つは環境整備（施設、設備の充実）であり、他の一つは教育課程の研究（教育内容の充実）である。

この運営に当たり特に必要なガソリンにも相当するものは教師

の愛情と創造性である。

管理の問題を現実にと求める姿が見られる。

(1) 園長の教育方針が明確で整然としているが園全体を見ると



生氣に欠けている。園長が独走している感がある。

(2) 教職員は積極的であるが、環境整備が伴わないで子どもが楽しんでいない。

(3) 施設、設備は充実しているが、教師が使いこなすことができ

なく利用されていない。

(4) 教職員の経験が乏しく保育がまともでないように見えるが、子どもが元氣一杯に活動して楽しんでいる。

(5) 園長が積極的な意見を持っているが、自園の経営内容と一致しない。

(6) 一切教師任せで各自ばらばらの教育をしている。そのため教師が安住していない。

(7) 園長と教職員との融和が欠けていて一体にならない。

ここで考えねばならないことは、園管理における園長を含めた教師の創造性をいかに伸ばし働かせるかということである。

創造性の生かされる所には意気と希望が生まれてくる。

「独創性の開発」の中でオズボーンは、

1、他に使いみちはないか。

2、ほかのアイデアの借用はできないか。

3、形、色、運動などを変えたらどうか。

4、拡大したらどうか。

5、縮小したらどうか。

6、他用したらどうか。

7、いれかえたらどうか。(成分、場所、人、順序)

8、逆にしたらどうか。

9、組み合わせたらどうか。

の九項目について創意を求めている。創造するポイントを与えて反省の資料と今後の方法の開発をねらっている。

本田技研ではこのことを企業に利用して提案制度をとり、新用途、転用、変化、拡大、縮小、代置、転機、逆、組み合わせによって各職場毎にアイデアを求めその良い案を登用している。

これはややもすれば単純な労働、機械的になりやすい日常の業務に何時もその改善の道を考えることに意味もあり、希望を持つものである。「考える園長、考える教師」を園経営に求めるのここに意味がある。園を管理する園長も馴れると積極性を失い、慣例によってことを処理しようとする。園長のその態度が教師に影響して教育の姿も消極的になってくる。

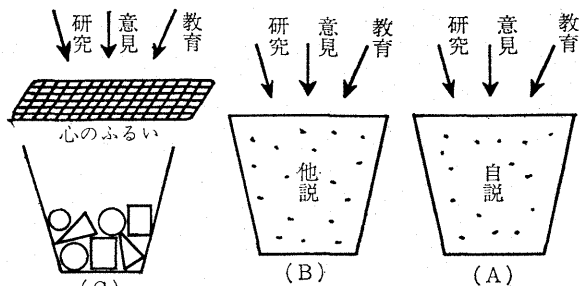
園長に創造性があり、絶えず創意工夫が働いていると研究も積極的になり、自園の行き方を反省し、他園の長所を学び、教師も毎日の保育に積極的になり、したがって教育の効果もあがるものである。

物の考え方に次の三つの型が考えられる。

(1) 自我が強く心の中は自説で占め、たとえばコップの中は自我で一杯になっている。そのため教育も意見も研究も入らないし受けつけない。

このような人を唯我独尊型、自己満足型、自信過剰型ともいえる。この人は他の長所を学ぼうとせず、がんこ一徹、名人気質で





進歩がなく保守的で内向性で消極的になりやすい。

(2) 次は他の意見に支配されて自我が見出せない傾向にある。

このためにAと同様に教育も意見も研究も、他の意見で一杯になっているコップの中に入らない。

このような人を自己忘却型、他説追従型ともいえる。主体性がなく主義主張のない不勉強、外向的で積極性を持つかのように見える

が風のまにまに信念がない。

(3) 次にこの人は広く意見を聞いても心のふるいにかけて選別し、簡単に鵜のみにしない。

自分が納得して初めてその意見を入れるのである。

この傾向の人を研究実践型、信念充実型、知行一致型ともいふべきで正しい批判、冷静な判断を行ない、信念を持ち自信のある行動をとり、じっくり物を考え良いと思えば実行する人である。

幼稚園管理の根本は、以上のような園長の教育観なり人生観から出発しているので、簡単にその態度を改めるということになら

ない。園長だけでなく、教師にも大なり小なりこのような三つの傾向がある。この根本となる態度を改めないと、その実を上げることはできない。特に女教師は保守的な傾向が強く、新しい経験に対しては取り入れず一応反対する傾向がある。ややもすると進歩的な前進的な態度が少ないことを考えねばならない。

園管理の障害になるこの傾向を先ず改めるべきである。

ただ例外もあり積極的に物事を処理しじっくり考えながら行動する人もないとはいえないのである。

なお物の考え方の基礎にも二通りある。

(1) 東洋的の考え方で直覚的思考を働かせ、総合的、具体的、全面的で働を働かせる。

(2) 西洋的の考え方で論理的思考を働かせ、分析的、抽象的、片面的である。

現在は分析的抽象的思考がよいように考えられるが、対人関係の場合、総合的に考え、時によると働によって人を判断することが正しくその人の全体をとらえることもある。

たとえば経験ある人が、第一印象でその性格を正しく促えるようなものである。

### 教師と創造性

幼児の教育で大切なことは、一人一人の幼児をみつめ、その幼

児に適した方法を選ぶことである。園の管理もいろいろの部面があるが、その中心は人事管理である。

園長と教師が触れ合う量が多ければ多いだけ心が通じ、教育の効果があがるもので、幼児と教師の場合も同様である。

幼児の場合は、

- (イ) 声をかける。
  - (ロ) 握手をする。
  - (ハ) 挨拶をかわす。
  - (ニ) 名前を覚える。
  - (ホ) 話し合いをする。
  - (ヘ) 食事を共にする。
  - (ロ) 世話をする。などによることが多い。
- 教師の創造性を伸ばし幼稚園教育の原動力とする方法として、
- (1) 教師の創意工夫したことは取り上げて実行してみる。
- 保育の方法、教材の研究、施設、設備などささやかな意見でもよいことは実行してみる。

知ることが行なうことよってわかるようになるもので意見だけでは効果がない。

多言不行より、不言実行を尊ぶようにする。一度意見を取り上げるのと一層積極的になって、次から次へ創意を生み出すものと異なる。

(2) 画一的の考え方をきけて物に即し、その場に即し、その人に即した方法を考えさせる。

豪華であっても客車になるよりは、古くとも粗末でも機関車になって自動したいものである。園のエンジンになることを使命と考えたい。

(3) 研究を奨励し、他の研究会に極力出席できるように配慮し、その結果は全職員に報告する。報告することによってその会の成果が伝わり、また出席者も報告する資料をとるために真剣に話を聞き物を見て来るものである。

(4) 研究会の依頼などは引き受けることもよい。その機会を利用して全園活動とする。

研究会などはややもすると対外活動のように考えるが、対内活動の意味を多分に持ち内部の研究意欲を高めるように利用して行き、全体の研究意欲を高めることに努力する。

(5) 園長を含めて教師一人一人自分を反省評価して長所短所を知る必要がある。

独尊型 研究型

従順型 理論型

反発型 実践型などいろいろ考えられる。

毎朝の三十分間を職員集会として互いに話し合い園長も一日の長として体験を語ることにしている。

その際は特に自分の失敗などを卒直に話すことにし、身近の所に研究問題を見出すことなど話し合うことにしている。

(6) 園長の反省として、次の十項をあげてみる。

- 一、人の和を得ているか（人事管理）。
- 二、事務が簡素、敏速に行なわれるか（事務管理）。
- 三、施設、設備に創意が働き、手入れが行なわれているか（環境整備）。
- 四、教育方針が一定しているか。
- 五、教育課程が編成されているか（指導計画）。
- 六、会計事務が整備されているか（経営管理）。
- 七、必要帳簿が整っているか。
- 八、園日誌、出勤簿、履歴書綴、健康診断書、指導要録、出席簿、経理帳簿、備品台帳など
- 九、総ての運営が合理化されているか。
- 十、家庭との連絡がよくとれ、理解し合っただけで一体となっているか。

教師の創造性を伸ばし、意欲的な教育を行なうものは園の管理者としての園長の物の考え方や教育観によるものと考えている。

(道灌山幼稚園)

## — 第一七回 —

### 幼稚園教育実際指導研究会予告

主催 お茶の水女子大学教育学部

附属幼稚園幼児教育研究会

本昭和四十三年は、例年とは全く異なる様式で本研究会をおこないます。次のような日程で、本園の開園より帰宅までの教育の実際を公開します。

会場 お茶の水女子大学附属幼稚園

期日 第一日 六月三日（月）

第二日 六月四日（火）

第三日 六月五日（水）

第四日 六月六日（木）

第五日 六月七日（金）

第六日 六月八日（土）

会員 会員は、いずれか一日のみに参加する

ものとし、参加人員を申込順により、

一日二〇〇名に制限します。

# 新任の教師に望む

関 計 夫

## 一、正しい教育のあり方

幼稚園の先生になる皆さんは、たいへんよい職業をお選びになったことをお祝い申し上げます。

どんな職業でも多少なりと社会的意義はあるであろうが、皆さんはやがていつか家庭の人となつて、お子様をもうけるであろう。その前に子どもを育て方について実地に経験を積むことはとても役に立つと思う。

このことは、小学校以上の教師についてもいえるはずであるが、現在の小学校以上の教育は極端な知育偏重であつて、正しい教育の姿からはおよそ縁遠いから、家庭に入る前の教養としては、甚だ不十分である。ほんらい、学校教育を受けなければならないほど、人間が完成されるはずであるが、日本の現状はそうなっていない。高校生は中学生より人間的に立派であるといえるであろうか。大学生は高校生より人物がすぐれているといえるであろうか、上級に進学するほど、知識技能がまじていることは確かであるが、人格が向上したという保証は全然ない。先だって、東大生と慶大生が就職内定の会社の金庫を盗み、あかないので返しに行くところを見つかるや、「返せばいいんでしょ。返せば」といったということが新聞に出ていた。もつとも名門であり有名校である慶大や東大がこの始末である。これほどゆがんだ教育はないであろう。

いまの学校教育で比較的に正常な姿をとれるのは幼稚園だけである。ここだけは、人格教育、情操教育、社会性の教育など、人間教育が考えられている。どうか、そのような正しい教育のあり方を守ってもらいたい。

というのは、幼稚園の中には、教育大学の付属小学校に入学しやすいというようなことを誇りにしているものがあるからである。在園中に入試テストの準備をしたりする。あるいはまた、算数や国語を教えたり、理科を教えたりする幼稚園がある。小学校へ行ってから習うことを、幼稚園のうちにつめ込むのである。

幼児の生活は何よりも遊びである。遊んでいる間に、幼児は絵をかくたり、リズム遊びをしたり、ものを観察したりする。

安全教育なども、幼児が元氣よく、じょうずに遊んでいけば、その中におのずから含まれる。だから、子どもが楽しく遊べるように指導するのが、先生の任務であるといつてよい。

幼稚園は集団生活であるから、その間に社会性や他人への思いやりの心も育ていく。ひとりでもブランコをいつまでも上領していればケンカになるし、お砂遊びでも、みんなといっしょでないと楽しくはない。

毎年、たくさんさんの幼児に絵をかいて貰っているが、幼児は他の子どもがかいた絵を、目を皿のようにして眺めるのが常である。幼児には友だちのすることが、いちばん影響するのである。

幼稚園教育という言葉にだまされて、小学校教育みたいなことをしないでしようにして貰いたい。幼稚園では、子どもたちが仲よく、楽しく遊ぶことができるように指導するのがよい。

それからもう一つ、幼稚園と保育園を別物だと思わないことである。幼稚園は文部省系統の教育機関で、保育園は厚生省管轄の保育機関などとは思わないことである。一方が教育で他方が親代りをするのだというような間違つた考え方をする人がいまでもある。子どもこそいい迷惑である。同じ子どもが管轄が違うだけで、異なつた取扱ひを受けるとすれば、これほどバカげた話はない。保育のない教育もなければ、教育のない保育もありえないのだ、文部省と厚生省の二つに分けることが、そもそも間違ひのものなのだ。

ところが、現場の先生のなかには、保育園の保母とは違ふのだ、自分は教諭なのだ、といつて、保育園の保母に対して優越感を抱いている人ときどき見かける。正式にはそのような区別をすることになっているが、世間は幼稚園の教諭などめつたにいいはしない。幼稚園の保母というのがふつうである。教諭だ、保母だと、称呼を異にするのがそもそもおかしいのだ。

## 二、宗教心を持つて

小学校以上の教育では宗教教育をすることが許されていない。これは長所ではなく、短所である。ほんとうは宗教教育は必要なのであるが、どの宗派を選ぶかが問題になるので、やむをえず宗教にタッチしないだけである。幼稚園でも、公立の場合、やはり宗教教育ができない。しかし、幼稚園には私立のものが多く、ここではキリスト教、仏教、神道などを基調とした宗教教育がおこなわれている、これはたいへん大切なことである。「三子の魂百まで」といわれる幼時に、魂の養いとなる教

育を受けることは、基本となる教養である。だから、その指導者になるあなたにもし宗教心がなかったら、勤めている間に勉強して、ぜひ何らかの宗教的信仰を持つようにおすすめしたい。

公立の幼稚園に勤める場合は、特定の宗派にわたる宗教教育を行ってはならないが、日の出、日没、偉大な富士山、良賢上人、花まつり、クリスマスなどを通じて、宗教的情操教育は行なわねばならない。この点は小学校以上の学校についても同様である。宗教教育はいけませんが宗教的情操教育は必要ということになっている。しかし、指導者である教師自身は何らかの宗教心を持っていることが望ましい。口に出して説かないでも、それは自ら子どもに大きな感化をおよぼすのである。それは教師としての大切な資格であるとさえいえよう。つまり、何らかの人生観を深く蔵していることは、指導者としては必要なことなのである。

あなたが教育者として、人の子を導こうと努力するとき、きっとあなたはあなた自身を導いてくれる誰かを求めることになるであろう。その時、先輩や園長の助言を仰ぐのは当然である。しかし、もっと基本的に人生の道しるべとなるものを要求しないではいられないであろう。その時、あなたは宗教に入りやすくする。その機会に求道心を起こして、どの宗教なりと、信仰の道に入れたら、それはあなたの人生のバックボーンとして一生の生活指針を得たことになる。こうして、幼児を指導しようとしたあなたが、逆に幼児に導かれて天国の道に進むことになる。それは幼稚園教育にもよいことである。

どの宗教を選んだらよいか、あなたは迷うかも知れない。偉大な宗教なら、どれでもお気に召す宗派で差し支えない。いまはよい世の中になった。先日、カトリックの幼稚園の研究会で、ハンス・ヘルヴェクさんに会った。この人は上智大学の先生であるが、カトリック教育協議会理事長である。ヘルヴェクさんは、「仏教であろうと、神道であろうと、いいものはいい、それはキリスト教からみれば、キリスト教なのだ」と語った。他の宗教に対して寛容とかトレラントというのではない。もっと積極的に同じものだと考えるのだ。そういえば、キリスト教信者の佐古純一郎さんが「親鸞」という本をかいて、親鸞上人を絶賛しているのも同様である。同様に、仏教信者はキリスト教を仏教だと思えばいいのである。こういう考え方は今までにはなかったことである。宗教心の厚い人を苦しめていた雑問はこうして今日をはじめて解決の曙光をみているのである。

だから、ちょうどよい時である。機は熟している。あなた自身の心の糧として、宗教心を持つことをおすすめしたい。

### 三、たえず勉強を

幼稚園はこじんまりしている。園児は百二十名位までで、千人も二千人もいるところはない。職員も数名である。だから、家庭的である。そこで、園長の個人的な仕事に使われるようなことがあるかも知れない。

小学校や高等学校には労働組合があつて、待遇改善を訴えたり、研究会を開いたりする。教育委員会や文部省から研究指定を受けて、一生懸命に生徒指導の研究をしたりしている。また、PTAで講演会を開いたりしている。

ところが、幼稚園は十年一日の如く、旧態依然といった感じがある。父兄の人数が少ないから、その援助で講演会を開いたり、研修に出かけるようなことができない。幼稚園での研究発表会など、小学校付設の場合以外に、きいたことがない。幼稚園はまるで沈滞しているように思う。だから、あなたが新任で就職された当座は、何もかも新しく教わることが多いだろうが、その時に感じた新鮮な感想を何かに書きとめておいて貰いたい。そのうち慣れっこになると、もう感じられなくなってしまうものだ。忘れないうちに、日記でもいいから、なるべく詳しく書いておくとうい。

そして、二年、三年と慣れたら、やがて現場の教育に新風を吹き込んで貰いたい。先輩によいところは無論あるが、十年一日の如く伝統でやっている職場は決して理想的ではないはずである。

社会は理想通りにはいかないとか、現場は厳しいものだとかいって引っ込み思案になれば、あなた自身もやはり、先輩と同じぬるま湯の人となることは必定である。

たとえば、子どもの絵の指導の仕方とか、音楽の導き方とか、遊びの指導など、日進月歩の勢いでたえず進んでいる。精神衛生やカウンセリング、グループ・ワークの仕方など新しい研究がどんどん進んでいる。わけても、子どもの正しい見方が必要になっている。いまの子どもは成長がずっと早くなっているのに、いつまでも赤ん坊扱いしている幼稚園が少なくない。毎日、子どもと接触しているのに幼稚園の先生はあんがい子どもを知らないのだ。これは惰性で教育し、新鮮な感覚でたえず子どもを眺め、子どもに驚くことができなくなっているからである。

これを打破するには、あなた自身がたえず勉強する努力を払う以外に方法はない。マンネリズムに陥ることのないために、新任のあなたにこのことを申し添えたい。



## 幼稚園の問題 いろいろ

毎日毎日、幼稚園では、さまざまな問題が起ります。そこで、そのいくつかをここでとりあげてみたいと思います。

### ○ かたづけについて

かたづけについては、次のような疑問が、おこります。

- ・「かたづける」ということは、どんな意味をもつか。
- ・どんな価値をもつか。
- ・プログラムの上における「かたづけ」の

位置づけは、どうなっているか。

- ・「かたづけ」のやり方が、結果においてどんなちがいを生じさせるか。
- ・子どもはかたづけをどう考えているか。
- ・おとなのもつ「かたづけ」の概念が、子どもにどのような意味をもつか。

これらの疑問の中には、すぐに答の出でくることがあれば、解答をもたないものもあります。そこで、ここでは、いろいろの実例をもとにして、考えてみたいと思います。

### やり方

ある幼稚園では、音楽が鳴り出すと、子どもたち全員が、遊びをやめて、いっせいかたづけはじめ、わずかな時間に、子どもたち自身の手で、かたづけ終わります。ある幼稚園では、「おかたづけをしましょう」という先生の声がかかれてから、三十分近くもかかっています。この二つのやり方のちがいを考えてみますと、前者では、非常に整然としていて、時間がかからないという点は、すぐれています。子どもたちの行動は、かなり反射的で、自身身の考えや選択はあまりみられません。

一方後者の方は、ややもするとグラグラとなりがちですが、そこに子どもの自発性というものが培われていくように思えます。早くかたづけることばかりでなく、そこに子どもの創意・くふう、相互協力ということをのびしてやりたいと思います。

### 時間の余裕

「おかたづけに三十分もかかるというのは、時間が、かかりすぎるのではないか」という人もあるし、「三十分かけてもいいのではないか」という人もありますが、部屋中いっぱい遊具を出して、子どもたちが、十分に遊びを楽しんでいたのなら、それをかたづけるのに三十分かかってもいいでしょう。遊びの活動に十分時間の余裕をもたせることが、必要だと思います。かたづけをすることが自体、一つの活動であり、経験であるからです。

### 遊びとかたづけの区別

「自分たちのところは、かたづけ終わって、他のところで遊んでいる子どもがいる。遊びとかたづけの区別がないのではないか」自分たちで遊んだものは自分たちでかたづけます。しかし、自分で遊んだものをか



たづけたという解放感とともに、次に何を  
してよいかわからない状態になります。  
そのために、遊んでいるのではないでし  
うか。このような場合、遊びとかたづけ  
の間に、はっきりした線をひくことはむ  
ずかしくなり、かたづけは、遊びのつ  
なぎ目としての役を果たしているよう  
に思います。

かたづけしている子どもと遊んでいる  
子ども

「かたづけ終わって遊んでいる子ども  
は、かたづけしている子どもの邪魔にな  
っているのではないか」

所在ない気持でいる子ども、手のあ  
いている子どもたちを集めて、次にす  
るもの準備をさせることが、それを解  
決させるでしょう。特にかたづけが  
遅れている所を手伝うようにいっ  
たり、レコードをかけてとか、その  
間を活用し、次の活動に入るゆ  
りとするとうまくいっているよう  
です。

#### 先生の態度

ある先生は、「おかたづけですよ」と  
いっただけで、子どもたちがどう  
するかみていませんでした。しかし、  
あまりそれに従う子はい  
ませんでした。また、ある先生は、自  
分

でもかたづけはじめて、言葉と一  
緒に行動にもあらわしました。

キャサリン・H・リードは『提案を  
効果的にするために、いくつかの技  
術を一緒に用いることが必要な  
ときがある。ことばではっきりと  
提案しても、それだけでは十分  
でないことがある』(K・H・リード  
著 宮本美沙子訳 『幼稚園』 昭  
和41年 フレ

ーベル館刊116頁)といっている  
ように、ただみているという態度  
も、反対にうるさいほどの届か  
ないところは先生が手を貸し、  
あとは子どもたちの手がかたづ  
けるという態度がなくてはなら  
ないと思います。

リードも『数人の子どもたちが  
一緒に遊んでいるような時、ある  
子どもは、ほかの子どもたちより  
早く提案を受け入れることができ  
る。グループの中で一人の子  
どもが提案を受け入れてくれれば、  
他の子どもたちにもそうさせる  
機会が強まる。グループに影  
響を及ぼしたいと思う時、どの  
子がまず最初に提案を受け入れ  
るか考慮に入れることは賢明  
である』(前記『幼稚園』117  
頁)と述べていますが、これはお  
かたづけ

をする際に、効果的に用いられる  
方法だと思えます。

かたづけについては、もつと  
いろいろ、考えねばならない  
ことがあるでしょう。実  
際指導の上で研究を続けて  
いかねばならない問題です。

○ 子どもとおとなの考え方のちが  
いについて

- この問題の根底となる要素はな  
にか。
  - どんな場合に問題となるのか。
  - それによってどんな支障がおこ  
るか。
- というような疑問がおこります。

ある幼稚園で、こんな場面を  
みました。子どもたちが、部屋  
の真中でくみあっていました。  
そのまわりでは、みている子  
どもたちが、「ーちゃんガンバ  
レ!」「しっかり!」と応援  
しています。そこへ先生が通  
りかかり、「あら、おすもう  
しているの」といってしばらく  
すると行司の子どもをおき、  
子どもたちを二組に分けて順  
番にくみあわせました。先生  
もそばで応援したりして子  
どもたちと一緒にいましたが、  
用ができたらしく途中でその  
場をぬけました。先生が、  
用を終えて帰った時には、子  
どもたちは、

みんな他の遊びに散っていました。保育が終わってから、その先生にその時のことを伺ってみますと、先生は、「ちょうど通りかかったら、二人の子どもが、くみあっていて、他の子どもたちも熱心に応援していたので、おすもうの遊びをもっと発展させてみようと思って、みんながわかるがわるくめるようにしてみました」と述べ、「子どもたちがころげまわったり、くみあっていることだけを楽しんでいるのだとは考えなかった」とつけ加えておりました。

もう一つ例をあげてみますと、何人かの子どもたちが、自分のこのみであき箱やえのぐ、セロテープをつかって、製作をしていました。その中の一人は、大きなダンボールを用いて、その上にすわれるほどの大きさのものをこしらえていました。それをみた先生は、「ーちゃんのは怪獣ね」といいながら、他の子どもに手を貸していました。するとそばにいた子どもたちも「怪獣だ」といいながら見にきました。その子は、その時は黙っていましたが、しばらくたつと「ぼくの怪獣はね……」ととなりの子に話をしてるのが聞こえました。この二つの

例を考えてみますと、保育者が自分の心に浮かんだイメージを言葉に表わしたり、行動にうつしたりしています。子どもとおとなの考えが一致している時は、問題がありませんが、くいちがっている場合には、おとなの考えが、一方的に子どもに影響を及ぼすことになります。

#### 考えのくいちがい

そこで「考えのくいちがい」という問題が生じます。子どもの遊びを發展させようと考えて子どもに示唆を与える前に、自分が考えていることと、子どもたちの考えていることがくいちがっていないかどうかを考えてみる必要があります。毎日の保育の中で、子どもとおとなのイメージのちがいがあったために、子どもの活動の方向づけにくいちがいが生じていることが多いような気がします。

#### 柔軟性

子どもの考えは、非常に柔軟性に富んでいます。その子どもたちを保育しているおとなは、同じように柔軟性をもつことを要求されます。考えの固まってしまった保育者から子どもは何を学びとれるでしょう

か。そのどこから創造性が生まれてくるでしょうか。おとなは誰でも、今までの経験からわり出したある程度のイメージを、心の中にもっています。そしてそれは、折にふれ、子どもに浸透していきます。豊かな情操と創造力を子どもたちに与えるには、まわりのおとなもその努力をしなければなりません。しかし、あまりおとなが自分の意見をうち出すと、子どもは、折角の發展しつつかある考えがそこで止まってしまう。おとなの考えのわくの中で、子どもの考えが發展しているのだとしたら、それは危険なことです。成長し、發展するべき子どもの考えというものを型に入れてしまうからです。

また、幼稚園という職場の中の間人間関係にもその柔軟性を必要としています。考えに柔軟性がないおとなの中にいて、どうしても子どもに豊かな創造性、人間性が生まれてくるでしょうか。子どももおとなも、各自の考えが自由に受け入れられるような環境にあってこそ「子どもとおとなの考えのちがい」という問題について考えることができるのだと思います。

(編集部)

# 幼児の友だち関係と教育

——日々の保育にふれて——



太田 一 栄

## (一) はじめに

私たち教師が毎年入園してきた幼児を前にして思うことの一つは、集団の中で早く安定しお互い同士好きになれるような方向に導いていく中で、安定感をもって自己を主張したり、相手の気持を受け入れて協力していくような幼児になってほしいということだろう。

教師対幼児のふれあいが十分満足されることが基盤となって自分たちで何かやろうかというときに、園生活においての友だち関係が芽生えてくるのではなからうか。幼児は幼児たちの中で発達していく過程において、ぶつかりあいがあり、その中で教師も援助していくことにより好ましい人間関係が育つのであろう。しかしやますれば教師が先まわりしすぎして失敗したり、他方では幼児たちにまかせつきりになったりしている場合も多いのではな

いかと反省することが多い。教師が中心になって遊びを指導していくことにより、いっそう友だち同士の深まりがあるのはもちろんであるが、私は幼児たちの素朴な遊びの中でみられた事例をもとにして、幼児が友人との関係でどのようなふうなまじり合いを学習していったか、教師自身がよい意味における無構造になる（心を開く）ことよって幼児たちから教えられたことを述べてみたい。

## (二) ひとりひとりの幼児が集団の中で安定する

(四月—六月)

縦の人間関係の系列である家庭から、横の系列である幼稚園という集団生活をする中で、幼児たちはいろいろな要求をもち、学習する中で成長していく。愛情、承認、優越などの要求も幼児たちが生活してきた経験や環境によって異なる。精神的抵抗を感じ、からにとじこもる幼児、壁とたたかうために腕力をふるう幼児などさまざまな現われ方をする。

入園してきた当初は幼児が早く安定感をもつようと教師の努力がはじまるが、まず教師を好きになつてもらうことと、ひとりひとりの幼児の心の変化をみぬいて、幼児をありのまま受け入れていくことが大切ではないかと思う。

### ① 教師は母親の代理人である

家庭での主体的な存在は母親であり、園生活での主体的な存在は教師である。幼児にとっては別々の存在でありながら別々ではなく分身となっている。別々の存在であると思つている幼児ほど園生活に適応しにくいのであつて、母親のふところから教師のふところへ抵抗なくとびこませるには、母親とかわらぬ愛情を教師ももつているということを感じさせることだろう。

#### 『せんせい、ママとおなじね』

Mちゃんは、一年私立幼稚園の経験があるので教師の心の片隅に安心感があつた。教師も泣いて母親から離れないH君や、攻撃的行動の多いK君、傍観しているそれぞれの幼児に心が傾いているうちに一、二週間がすぎた。

H君がやつと母親から離れて平気になつた三週間目から、Mちゃんが教師のあとを追うようになった。手をつなぎたがり、当然できることでも、「先生やつて」といつてくる。姉が一人、母親が間もなく出産という情緒的に不安定なことは理解された。幼児たちに好感はもたれているが、本人は幼児たちには余り関心を示さない。先生さえいてくれれば安心なのである。教師に愛情を求

めるような行動がしばしばみられたが、つとめて接触をもつようにした。そのうちに時々泣いている幼児には、「どうしたの」と尋ねたりかばったりするアンビバレンスな面がみられるようになってきた。

六月上旬、母親がお産のための留守中のできごとである。雨ふりあがりに登園途上ころんだと洋服を汚したり、いつも「お便所へ行つてもいい？」と念をおしてから便所へいくMちゃんが、二日続けてもらしてしまつた。早速職員室で着換えをすませると明るい顔で、「先生、ママとおなじね」といつて泣きやんだ。教師にやつと母親のようなことをしてもらつて親密感もち心が安定したのである。

それからは、Sちゃんという友だちができ、粘土遊びでつくつたケーキのおみせやさんになつたり、ままごと遊びの友だちの中へ入つていった。

誰か一人とだけ親しくなることによつて、自信や安定感を得ることができ、お互いに同じように好感をもち、求めあい、たよりあえるという感情から生まれた自信や安定感はずばらしい成長発達を可能にするようである。

### ② 素朴な遊びは教師にもまざる

教師が幼児の特徴をつかんで援助するとき、外向的なはつきりした行動を示す子は教師としても要求を受け入れてやるような援助がしやすいが、内向的で表情や言葉が少なく自己主張の弱い幼

児は、現在、集団生活の中でどのような要求や不安をもっているか、その洞察ははなはだ困難である。

### 『紙ひこうきが屋根にのつた』

S男は、一応身のまわりの始末はできるが自分から積極的に友だちの仲間入りをしようとせず無表情に近い傍観である。これは幼稚園入園前の環境が、母が勤めているので祖母が主として世話をし、男の子は乱暴だという理由で、姉か、たまに女兒とだけと遊んでいたという影響もあると思われる。内向的な性格のためか教師が手をつなぐことを恥ずかしがるようすもみられ、集団遊びにさそっても動こうともしない。教師はどうやってら遊ぶようになるのかいろいろ試みた。えのぐをどいたりするとき、教師の手伝いをして水ぐらいはくんでこられるようになった。

二か月ぐらいたつと友だちの遊びをみて笑顔をみせるようになったので、どの友だちが好きかと尋ねると、皆から好感をもたれている、OとPとCの名をいう。その幼児たちに教師が「遊んであげてね」といった当座はいいがすぐ友だちから離れてしまう。熱を出して園を休むようになったので抑圧された感情をどうときほぐしたらよいか困った。ふぎけっこをしたり、すもうをとっても、二、三回でやめてしまう。六月中旬のことである。S男の好きなOの紙ひこうきが屋根にのつてしまった。そこでS男に「O君がひこうきを屋根にとぼして困っているの。Sちゃん体も大きいし力があるから机を運ぶのを手伝ってあげて」といつてみる。今までも机運びは手伝うようになっていたが感情は動いていな

い。今日は好きなO君のためである。二人で机を運び五、六人が椅子や机をおきえてOがとつてみたがとれない。最後は教師がとつたが、「O君、よかったわね。S男君はいい子ね。O君が一番好きなんだって」といつてやる。

### 『S男のプレセント』

数日後、てんとう虫がいるのをみつけた教師は「先生からのプレセントよ」とS男の手のひらにのせてやる。他の幼児は「家に注射するものある」などガヤガヤいつているのにS男は興味なく、片手をポケットにいれて、「これO君にやる」と小さなウルトラマンを二つだす。家から物をもってきて交換することは禁止してあるが、S男は、どうやったらO君と遊んでもらえるか考えた末のことかも知れないし、今まで意志表示ができなかったのかも知れないと思い、「そうね、いい考えね」といつてやる。きまわりを破ることになるが、先生が受け入れてくれたという安心感を与えたかった。

S男はだまってOにさしだしているので「O君が好きだからあげるって」と教師がS男の気持を伝える。「いいな」と他の子ばうらやましそう。S男は「これ四日市にうっとったん」とはじめて友だちに口をきく。「僕もあしたかいじゅうもつてきたる」とO。OはもらったおもちゃでKと遊ぶ。教師はKに「S男君とかわつたげてね」といつてみる。S男は、パパーンという元気のいい声が出ないので、Oは「やーめた」と保育室へいつてしまう。S男も後からついでいく。

## 『新聞の刀で』

保育室では赤影ごっこが遊ばれている。O、E、F、Kも「さして」と仲間入りをする。マジック板で手裏剣をつくって投げている。S男は傍観していたが、先日来からOとの間につながりを見つけたS男は、やや気持を動かしたように感じられたので、「S男君もあばれたら？」ときそってみる。最初はOの後のついでに上げていたが、Kがむかってきたのでバツとやりかえした。おとなしく誰からも攻撃されたことのないS男だが一つのボールが除かれたようにみえた。十人の幼児が追いかけて逃げたり、バツバツとなげている。

教師はこのままでは危険があるので、どうしようかと迷って、「顔からしたにしましょうね」といったものの、教師の態度はこれでよかったかどうか切り切れないものが残った。

つまり、エネルギーの発散ならば他の遊びに方向転換させた方がいいのではないか、何か問題が起こる前に提案した方がいいのではないか、いっそストップをかけた方がよいのではないかと迷っていた。そのうちにいままでのうっ積されたものがはき出されるように活躍していたS男のマジック板が、Tの顔にあたり、Tが泣き出した。やはりこんな事態になる前に何らかの配慮をすべきだったと反省したが、友だちといっしょにいることは楽しいことだということをS男自身に発見させたかったし、そのことによる満足感をもう少し味わわせてやりたいと思ったのである。しかし、相手を泣かしたということで友だち間に不信感を抱かせたと

なると結果的には不成功に終わったことになる。

予想通りに、「アラーアラーTちゃんを泣かした」とはやしたたので、S男も遂に泣きだしてしまっただ。いまでも泣いたことのないS男が大声をだしたので安心した。これで声をだすことが平気になったのではないかしらと思つて、教師が何かいおうと思つたらOが「手裏剣は危いでやめよ」と提案した。一応自分たちで納得のいく解決ができたのであろうか。

教師は「そうね」といつて次にどうするかみていると、組み板の棒をとりだし画用紙を丸くきつて刀のつばをつくりだした。この子たちはよほど暴りたいのだなと思つていると、ヤッヤッときりあいをはじめた。

行動をかえさせても無理だと思つたので、「その棒があたりと危いからこの新聞紙でつくってみましょうか」という。教師のさそいかけがなければ遊べないH、Qも遊びはじめた。泣いたことで平気になったのかS男もヤッツと声をだして友だちをきつていく。どこに教育的なものがあるだろうかとも考えてみたが、教師は子どもたちのようすから余り危険性はないし、いままでもつていたから、を少しでも除去できたらという願いをもつて、紙屑の始末だけ約束して遊ばせた。

二、三日続いたらS男は動きまわることが平気になったのかブランコなどの遊具も使って遊ぶようになった。

もしこのとき攻撃的な感情のはけ口を大工遊びや体育的なものにもつていったとしたら、S男は声を出すきっかけがおくれたか

も知れないし、〇の五人のグループへの仲間入りができなかったかも知れない。

入園当初、抵抗なく入れる遊びの一つに郷土的な集団遊びがあるが、幼児にそのような精神的レディネスが培われていない場合、友だちとの結びつきはなかなかできず、何でもない遊びがきっかけになって壁がとれるということもあるから、気になる遊びだからと、一概に禁止したり行動をかえさせたりせず、見守っていくことも大切ではないかと思った。

以上、二つの個人の事例をおって仲間に入りこめたようすを述べてみた。

大体の幼児の交友関係は、最初は主として遊具を仲立ちとして広まっていく。ブランコなど使用人数に限りのあるもの、積み木、組み板など数が限られているもの、一方、集団遊び、鬼遊びのように人数に制限のないものなどにより、友だち同士の接し方も異なってくる。

一学期の幼児の状態は、ひとり遊びを楽しんでいる幼児もあれば、教師と遊ぶことを楽しんでいる幼児もある。平行遊び、連合遊びなど自己選択による自発的な遊びを二、三人の小グループで楽しんでいる幼児もある。

いずれの場合も、集団生活とはきり離せないものであって、幼児たちが安定して活動できるということは、背後にある集団に自分が受け入れられているということが基本的なことであろうし、そ

の第一歩は幼児が教師に受け入れられていると感じさせることでなければならぬと思う。それが友だちと友だちとの関係のひろがり、深まりへの糸口となり、ひいては集団生活の中で、自分を見出し、自己を発現できることになるのではないだろうか。

しかし、たえず教師が援助するのではなく、危機的場面を幼児自らのりこえることによって対人関係を学習していく場も必要となろう。

### (三) 教師の手から離れて遊ぶ(七月)

ぼつぼつ教師の手から離れて活発な遊びが展開されるようになると、いろいろな争いが起こってくる。

幼児たちの自然発生的な遊びをみてみると、女兒はままごとなどでの仲間入りとか、役割で、「あの子がお母さんにさせてくれない」とか、「お母さんばかりしている」とかいう自己主張も起こるが、次第に遊びをリードしていく幼児が現われると、その子が役割をきめるようになる。

「あなた二番目、Cちゃん三番目のお姉さんよ」とか、じゃんけんによって一応自分自身が納得して遊ぶようになってくるが、まだまだ教師の見守りがなくともうまくいかない。

#### ① 教師自身の心をひらく

『ぬかしたらだめ』

ブランコ遊びでもなれてくると、単にこぐということから、そ

れだけではものたりなくなつて、「靴とぼし」が遊ばれるようになる。

グループは片方八人ずつ、一対一の競争であつて、グループ間の競争となるルールである。Hが靴がおちたところに線をひき、「T君の勝ち」といつている。

T「何対何？」 F「四対十」 T「こつちが四やな、十対十にしたるか」 F「うん」

T「H君きらい。一番弱いから」 Hは靴とぼしがよくできない。自分たちのグループにとつては不利である。その気持をきらいといふことが表現した。この子はいつもきらわれているのだろうか。といふことに教師は疑問をもつたが、この場面ではうまく参加できないので、そのまま見守ることにした。

O「T君、A君をいれたつてもええか？」とTの許可を得る。

Tは靴とぼしをしてから、前へわりこもうとしてゐる。Tは腕力のかよいホスである。B「こらー、ぬかしたらだめ」 T「なんでや。あいとつたもん」といつたが後へならぶ。Bは片方の靴をとばしたが遠くへいかなかつたので、「くやしい」といつている。

そこへ、他の組の女兒が「いれて」とくる。男児たち返事をしない。教師「いれてといつてるわ」 T「さしたる」しかたないといふようす。女兒は自分の番がきたが靴をとばさない。O「女の子は靴とぼしつせんのか？」 女兒「したないもん」 T「もーええやろ」 B「もーええやろ」 女兒「まつてちようだい。もうおりる」 次の女兒に対してもブランコにのつたすぐから、男児口々に「も

うええやろ」といつている。女兒「そんなにいわんでもいいやないの。今さっきのつたばかりやのに」と女兒はブランコをおりていつてしまつた。

教師は何かいふべきであつたと反省する。つまり、「数はいくつずつなの」とか「そうね。今のつたばかりだから」とか、「靴をとばさない方がいい子なのよ」とかいつた方がよかつたかも知れない。男児たちは競争をしている。そこへ女兒がきたのはいいめいわくである。早く行つてほしいといふ気持もわかる。

女兒がグループの一員として活躍するためには、靴をとばさなくてはならない。教師としては、今の段階では一応認めてゐるが、話し合ふことによつて何か幼児たちにも考えさせたいと思つてゐるので、何もいわず見守つていた。しかし女兒の感情は不満であらう。

『C君がぬかすもん』

O「これからいくよー」 T「O君いつもようとばさんね」

相手を傷つけることばである。O「Y君とぼくや、Yちゃん、いつも勝つからいやだな」やはり競争場面というものは幼児にとつて何の助けにもならないのかなとも思ふ。

F「O君がんばれよ。Yちゃん負けよ」これも教師として気になることばだが、自分の組を応援する気持はわかる。「O君がんばれ」だけでいいのになと思ふ。教師はFに「さういおうと思つたが、教師自身その遊びに入りこめないでゐるので黙つてみてゐることにした。



R 「やー勝った、勝った。Y君勝った」相手側のグループからきこえてくる。

O 「今のあかん。もう一度な」T 「あかん」の一言でOはブラコンコからおりる。

OもTが強いので一目おいているし、今自分のいったことは正しくないという判断はあったようだ。教師は、他の組の幼児が相手側にきたので、Pのグループへいって見た。

P 「やーめた」教師「どうして」P 「だって松組のC君がぬかすもん。あとからきたで後へならばなあかん。ぼくがあとになるもん」PはCがずるいと指摘し、自分があとになるからやめたいとはっきりいっている。

教師「そうね、ならんでいて、せっかくぼくの番がきたんだものね」とPのいやな気持が先生にもよくわかるということごとばにしていってやる。ここで先にCに対して、「あなたもやりたかったら後へならばといわ。すぐ順番がきますよ」といえばよかったが、教師がPと話している間にCは列から出ていってしまった。

どちらを先に認めるかということは非常に困難である。靴とぼしがしたいというCの気持を先に認めてやってから、CのしていることはPにとってはいやなことなのだからと相手の気持も理解させたらPもCも感情にしこりが残らなかつただろう。タイムミンクの困難さを感じる。ここでCがどどまっていれば、PとCの結びつきはよくなっていたかも知れない。

『ぼくの前にいらたろ』

そこへ向う側のグループのTがやってくる。

P 「いらたろー」TはPの前へ入る。教師「T君が前になってもいいの？」P 「この子強いもん」教師「松組の子はいけない」といったのはなぜ？」P 「E君がT君いらたってもいいといったもん」と後のEをさす。

以上の実践から次のようなことが問題となろう。

幼児の世界は矛盾だらけである。ことばをかえれば自己中心的なのだろうが、二、三分前はC君を非難していたPが、自分あるいは属しているグループに都合のよいことであれば平気で自分のいったことと反したことをいっている。Tは腕力があるので、これから先、遊んでもらいたいがための追従的気持の現われとも考えられる。

Tは最初Aグループで列にわりこもうとしてBに注意され、後についていたが、Bグループでは、Pの希望もあったのでわりこむことについては別に悪いとは思っていない。

わりこみに対しての行動を指摘されたことについて、Tは同じ級の友だちだったので受け入れたが、Cは他の級の幼児に指摘されたということで人間的な相通するものがなかったため、列からでてしまったとも考えられる。松組のCは明らかに自分の否を認めているのでけんかにはならなかったが、教師がいたからとも思える。

教師は、Tに「皆順番を守っているのだから、T君も後へなら

びましよう」といい、Pに対しては、「後へいってもぼくたちのグループだからいいでしょ」といってその場をはなれたが、教師自身に全面的に受け入れにくい遊びである場合、なされている行動に対しての配慮はマイナスになることがある。

一見したところ、グループで遊んでいるようだし、その遊びがある時期まで教師も認めてやろうと思っているときには、みのがしやすい場面であるし、教師もその遊びに参加しにくいということとで指導が適切になされにくいということになる。

しかし、この遊びでも、すでにボスのな幼児と、下積みになっている幼児、追従的な態度を示す幼児、順番ということに対しての個々の幼児の反応のしかたなどにはいろいろの問題が含まれている。

このようなときに、むしろ、幼児同士のぶつかりあいのありのままの姿が現われているようにも思い、教師としても反省させられるものがあった。

## ② 幼児の自己主張と受け入れ

『ぼくが先だよ』（例一）

すべり台とかシーソーなどでは、男児女児をとわずよくのりものごっこが遊ばれる。石や草花などが切符になって、のりたい人は、それをもって改札の友だちなり運転手にあげるとのせてもらえるという遊びがよくみられるようになる。

七月のある日、ままごと遊びの発展から、電車にのることにな

り、保育室の中を、前の人のスモックをもって走りまわっていたので、教師が縄をだしてみた。

KとYは最初は、「ぼくが先」、「ぼくが先」と、いいあっていたが、そのうちにKがYの頭をたたいたことから、とっくみあいのけんかとなる。わけを聞くと両方が運転手になりたいのだ。

K「ぼくが先に縄をみつけたんやもん」Y「ちがう。ぼくや」

K「ちがう。ぼくが早い」とまたとっくみあいが始まる。教師

「両方が運転手になりたいのはよくわかるけど、これはぼくだけの縄じゃないのよ。ぼくが先だとY君もK君もいつていたので、早く遊べないでしょ。どうしたらいいかしら」

Y「だって、ぼくが先にみつけたんやもん」

K「ちがう。ぼくが先にとったんや」

この争いになにごとかと五、六人よってくる。

教師「Y君とK君二人が運転手になりたいんだって。みんなはどうしたらいいと思う」即座に「じゃんけんできめたらいいよ」

教師「そうね。先生も今そう思っていたところなの。同じ考え

ね」YとKにむかって、教師「皆もじゃんけんできめたらいいっていつてるけど、どうする？」Y（しぶしぶ）「じゃあ、じゃんけんする」Kがグー、Yがチョキ、Yが負ける。

教師「じゃんけんできまったんだから、K君が先ね。またY君にかわってあげてね」と二人によくわかるようにいう。Kが運転手、Yが車掌になって走りだしたので、教師も内心ホッとしていたが、中庭を一まわりしてきた電車をみたら、Yがいない。

K 「つままないな」教師「どうしたの？」K 「だれも車掌になつてくれない」教師「どうかしら。ぼくがはじめY君にかしてあげたら、おもしろく遊べてたかも知れないわね」K 「うん」教師はKがあまりしょんぼりとしているので「先生を車掌にしてくれる？」というときK 「うん」と嬉しそうだった。

『ぼくがなるよ』(例二)

腕力が強く活動的なDが「ぼくがなる」と運転手になる。友だちに、D 「どこへいきたい？」C 「北海道」D 「そんなところまで線路はつづいてないから、もう少し近くに」C 「名古屋」

A 「鈴鹿サーキット」

D はあちらこちらでお客をおろしてきたが、次にのせようと思うとはつきりわからないので、D 「駅がはつきりわからなくて駅をつくらなあかん」といつて止まっているところへ、L子がくる。

L子 「私、運転手にならして」D 「だめ、ぼくだ」G 「だめ、D君一番、ぼく二番」L子 「さして」教師「お客さんになつたらどう？」L子がことわられたので別の役割ではどうか尋ねてみる。

L子 「私、運転手になりたい。じゃんけんできめようよ」とはつきりいう。二、三回いいあったが、結局じゃんけんをする。L子が負ける。L子 「こっすい」G 「なんで」L子 「あとだししとる」D 「そんなことしない。Lちゃんがチョキ出して、おれがグーだししたもん」

G 「ちがう。いっしょやぞ」Gは一応Dの強いことを認めてい

るので、Dのかたをもっている。L子「もう一回はじめからしようか」G 「きまったやないか」L子は不満そう。教師「そうね。みんなはどう思う？」「同じやった」「あとだしやった」口々にいう。教師のみていたところではL子の主張通りだったので、教師「先生もよくわからなかったから、もう一度じゃんけんしてね」という、その結果、L子が勝つ。Dはその前に「駅がはつきりわからない」といつていたので、D 「G君、駅をつくろう」と運転手をゆずって机をGと運びはじめた。

以上の実践から次のようなことが問題になろう。

(例一)では、一応じゃんけんということで役は決まったが、Yは不満なのでぬけていつてしまった。

やはり、このような場合は、一緒に遊ぶようにしむけたからといつて表面的に解決がつくものではない。両者の気持が結びついていない。一方通行である。

また、Yの感情をくみとつて、縄をもう一本だしても解決にはならないだろう。

ふだんからKとYは近所なので遊び仲間ではあるが仲がよくない。防衛的で攻撃的行動が多いので、教師としても何とか仲よくさせたいと思つてこのように助言した。

しかし、あとの配慮がかけていた。ここで教師がお客さんになつてのつていけば、Yの感情もちがった方面に広がつていったかも知れない。このとき教師は、他の幼児が「ぼくにも縄をかし

て」といいにきたので、その準備をしていたため、LとYにまかせたのであるが、危機的場面のLとYについていくべきだったと反省した。

(例二)では、ふつう女兒が男兒のグループへ入る場合、あとからきたのだから、お客さんになる幼児が多いが、L子は自己主張した点はえらいと思った。

この頃になると、腕力の強い子がちょっとしたリーダーとなることがおおく、GはDに追従的な気持をもっていることがことばに現われている。

Dは自分のじゃんけんをあとだしとは思っていないのか、思っただけでも口で単にそういつているのかはつきりしないが、教師のいない場合だったら、このまま押し通してDが運転手になっていくかも知れない。

教師はDの気持を傷つけないかったので「はつきりわからなかったけど」といういい方をしたが、L子の主張通り、「D君はあとだしと思っていないけど、本当はあとだしになるのよ」とはつきりいふべきだった。Dはいつも自分が勝って思い通りにしていたとなると問題である。

幼児たちに問題をなげかけてみたが、「同じ」という子の中には、Dに対して追従的な気持がある幼児かも知れない。

結果的にはDはL子に負けたが、一応運転手になっていたのでも満足であり、次は駅長へと役がかわっていったから、運転手をゆずったことについては不満もなくなつたし、一応他人もうけい

れたわけである。

しかし、幼児の世界は強いものがちとということがよくみられる。「ぼくの」ときめてしまうと、その子に追従的な気持をもっている子は、それをボスにゆずり、交替で使うこともあきらめるかも知れない。教師はそのような場面を見逃すことのないように、やはり適切な援助が必要となろう。

しかし、自分たちで考えた遊びの発展に伴って他に満足を見出していくので、必ずしも、教師が全面的に援助したり、けんかを予想して最初からくいとめる必要はないが、好ましい友だちとの結びつきになるかどうかは、一学期では、やはり教師が見守ってやらなければならぬだろう。

#### (四) 友だち関係と遊びは深いつながりをもっている

遊びなくしては友だち関係は成立しないといつても過言ではない。友だち関係を深めようと思えば、遊びを充実させることである。

充実即ち満足感と成就感だがよりよい充実を得るチャンスを幼児に与えられるのは教師であり、教師の配慮―適切な助言と適切な環境―が教師と幼児とのふれあいをいっそう豊かにするのではないだろうか。遊びを幼児だけに任せておいたのでは発展性は少なく、満足感はあっても成就感は少ないと思われる。

しかし、教師が表面にすぎることなく、幼児たちの中から遊ばす遊びを尊重して幼児とともに遊ぶことにより、よい刺激を与え、

幼児が十分自分の能力を出しきってこそ好ましい友だち関係も生まれ、遊びが深まり、広がり高まると同時に、友だち関係も深まり、広がるのではないだろうか。

『この指とーまれ』

・競争場面での教師は鎮静剤である。(例一)

二学期に入ると幼児たちの活動もグループでなされることが多く、いろいろな遊びを考え出す。最初三、四人が相談して遊びはじめたりレールあそびに、やりたい子が集まり、他の組の友だちに混って遊ぶようになる。

H子、M子、Y子、S子の四人が、「リレーごっこしたいもんこの指とーまれ」と園庭を歩いている。そこへ男児四人（S男も含む）女児二人が「さして」とやってくる。「やまこーわせ」「あいけんな」「あいけんな」なかなかきまらない。

O「二人ずつじゃんけんしよう」

M「そうやな」

このときH子が、M子、Y子、S子に耳うちをする。

H子「グーとパーの方がええわ」

Y子「そうやね」「グーとパーやんな」と何度かじゃんけんをする。何度かやっているうちに耳うちしたことが判明した。全部パーを出そうとといったらしい。同じ組になれることを考えたようだ。

H子「一人おおい」「グーとパーやんな」四回目にグーとパー

にわかれた。他の子は気づかないのか何もいわない。

H子「背の高い順にしようね」H子は背が高い。そこで背の高さを比べあってならぶ。Oが円筒とボールを二カ所にならべている。

教師「先生も仲間に入れてね」B「誰かつれてこなあかん」側でみていたT子を教師がさそってくる。

M子「先生、こっちへ入って」O「ずるい、じゃんけんせなだめ」H子「グーとパーやに」二回目にT子がグー、教師がパーをだす。M子「わー、うれしい」と大喜び。T子が男児のグループになったが別にいやがっているようでもない。

H子「誰が審判になる？」教師「審判はどんなことするの？」

H子「ここに線をかいてヨードンっていうの。線がきえたらまた書くの」M子とOが「やりたい」という。D「じゃんけんできめたらいい」という。M子が勝つ。M子「よーいどん」先頭はボールをもって走り、円筒におき次にタッチするという置換競争である。昨日はボールをもって走り、次の幼児に渡すという方法で遊んでいたが、今日は手でタッチするというこらしいがうまくできない。前の走者がこないうちに次の走者が走り出す組もある。

M子「線からでたらこっすい」という。一回目はH子のグループが勝つ。O「手をうってもらわん先に出るもん。ずるい」教師「そうね、タッチがうまくいかないわね。何かいい考えはないかしら」S子「バトンはボールもつとじまになるし」S男「ハシカチは？」O「ポケットに入るからいい」教師「そうね。皆は

「どう？」「ハンカチでいい」二回目はハンカチをバトン代りにして競争する。夢中になると線からとび出すが、タッチは割とよくできた。次から次へお友だちがふえ五回つづけて遊ぶ。

『勝ち、こつち、負け、あつち』

・教師がぬけても遊べる(例二)

数日後、園外保育のときに、他の男児のグループのリレーごっこがはじまった。

教師も加わる。グループわけは、「じゃんけんできめよう」「二人ずつな」「あいけんぽん」「勝ち、こつち、負け、あつち」組みわけがきまる。G「走る順をきめよう」E「誰がこの中で一番速いかな」J「ぼくさ」L「ぼく」G「むこうの組は誰がはじめて走るかな？」と相手側の作戦をみている。教師はこの子たちなかなか考えているわという気持で黙って聞いている。I、L、Gなど「ぼくが速い」といっていたが、幼児たちにはどの子が一番速いのかわかっていないのだろう。I、教師、L、Gの順にならぶ。「アッ、僕、O君と。絶対ぼくの方が速いぞ」E「なにをもって走る？」教師「そうね、何がいかしら」E「ぼうしは？」教師「そうね」G「なにをまわってくる？」適当なもののみあたらない。教師「何もなければ先生の帽子にしましょうか？」「そうだね」といって遊びはじめる。

『今、ぼくが運転手だから』

・遊びの発展には、チャンス

をうまく利用することが必要である(例三)

つぎに積み木でよく遊ばれるのりものごっこをみてみよう。

男児七人が積み木と椅子でバスをこしらえ、フラフープの輪をハンドルにして遊んでいる。F「次は四日市、近鉄四日市」O「さして」F「切符がいります。旅行クーポンの方は三枚なければいけません」M「ぼく名古屋」S「ぼくも」I「さして」M「切符がいるよ」Y「さしたるか」I「運転手にさして」F「あかん、今ぼくが運転手だから」といわれてIは後へいく。F「次は名古屋」ワンマンカーである。F「おーい、みんなガソリンがへったぞ。ぼくがくれたるわ」とまねをする。

その間にIが「ぼく運転手になろ」と前へいく。やはり運転手になりたい気持をおさえていたのかも知れない。L「さして」F「Y君にきくの」L「Y君さして」返事がない。

再び、L「Y君さして」Y「いいよ」運転手ではないがYが主導権をもっている。I「発車準備」Fがガソリンをいれている。E「ぼく車掌さん、次はどこって町の名前をいう人な」と遊びがつづく。

『この紙でつくついたら？』一枚の紙片から遊びが発展する。バスごっこのあと、パンやさんごっこになる。F「ここはパンやさん」「パンないかなー」O「そーや、果物をパンにしよう」O「おーい、いっぱいパンがあるよ」F「パンはいりませんかー」E「パンはいりませんかー」この子たちはパンは何でもいいのである。ただ遊ぶことに一生懸命である。教師はそばでみてい

たS子とP子をさそってパンを何でこしらえようかと相談している。

L「さして」バスごっこからいったんぬけている。Y返事をしぶっている。F「ぼくは、はじめからずっとしてたでええやろ」Y「うん」「Lちゃんもさっきしとったでいれたるわ」S「いれて」Y「売る人満員ですから、買う人になってください」F「280円です」F「毎度ありー。大きいパンですよ」T「パンがやけたら、ここから出すのさ」Y「できたてのパン」といっているが、ほとんどの幼児が戸外で遊んでおり、消極的な女児四人がままごとをしているだけである。

教師「お客さん、なかなか買いにこないわねー」と女児にきこえるようにいう。女児「お金ないもん」という。教師「じゃあ、この紙でつくったら」と紙をわたす。この消極的なグループは、いまままごとの遊びに入りこむことができず、お母さん役になることはもちろんなかった。ままごと道具が自分たちのものになったという喜びを味わっている段階である。お金ができたのでどうするかみていると、この消極的な女児のグループは、パンやさんの男児のグループといままであまり交流がないためか、ややおおくれがしているようすなので、教師が、「わたしもお腹がすいたから、パンをかってこようかしら」といって、「A子ちゃん、一緒に買いにいきましょう」といってやる。それで気が楽になったのかA子とC子は二人で「パンください」H「どれがよろしいか」Y「100円です」O「またどうぞ」とやや活気をおびてきた。

それまで戸外から入って絵本をみていたHや、外から入ってきた四、五人もさっそくお金づくりがはじまり、銀行ができる。

『ぼくたちもつころう』・遊びの発展は友だちからの刺激による。

パンやさんごっこことならんで、おそばやさん、氷やさん、本やさん、おもちゃやさんができた。おもちゃやさんでは、最近組み木で動物をこしらえていたやはり消極的な男児の四人のグループが、パンやさんに刺激されたのか、「ぼくたちも作ったものをうろうろ」ということになった。このような遊びは、一学期でもみられるが、グループ間の交流があまりないのが、二学期になると総合的に遊ばれるようになってくる。「ぼくが社長さんになる」「じゃあ、ぼくはお金をもらう人」と会計係もできた。一方パンやさんからわかれたメンバーが氷やさんになって、「氷大盛、大サーピス」などといっている。ままごとのグループでは、消極的な女児に加わって活動的な女児のグループも混って、家のつくりなおしである。H子「ここお風呂場がいい」S子「台所はここ」M子「犬ごやがいる」と犬ごやをつくりはじめる。すると今までパンやさんにいたO、I、Kが「犬になりたい」とワンワンほえたてる。パンやさんは自然消滅の形になってお家ごっこが主体となる。

H子「先生、テレビつくりたいから紙ちようだい」と製作コーナーから画用紙をもっていく。H子はテレビの形をかいて、積み木に紙をはっでもいいかをききにくる。Fがそれをみて「そんなテレビつもらん。もっと大きいのがいいな」といって、F「先

生、大きいテレビつくるから、大きい箱な〜い」とくる。教師はダンボールの箱を二つ用意する。Fの男児のグループがづくりはじめると「私たちもつくりようか」といってテレビづくりとなる。

『テレビとお話をつくりよう』・教師がまとまりをつけてやるという遊びが発展する。(実践例省略)

以上、三つの実践から次のようなことが考えられる。

例一のような競争の場合、教師がともに遊ぶと競争場面でのたかぶった感情がぶつからないで遊びが長続きするし、メンバーも次第に増してくる。

二学期になるとルールのある遊びでは、その遊びを提案した幼児がリードしていくことがおおい。いつも同一の幼児がリードするのではなく、遊びがかわれば適当に交替している場合もある。

一応自分たちで目的をもって遊ぶようになり、問題がおきると自分たちで考えようというきざしがみえてくる。すなわち、自然発生的に遊ばれる場合は、やりたい子が参加し、三、四人のグループに他のグループ、または個人が参加するのであるし、持物、人数に制限がないので、仲間入りも余り抵抗がなく、けんかの場面は少ない。しかし、相手側のルール違反は指摘する。グループの性質とか、社会性の発達程度によって組み分けの方法が異なるのはおもしろいと思つた。人数を平等にしなければいけないことも理解できるようになっている。

話し合いが自分たちでできるようになると、メンバーでルールとか方法についての相談ができるようになる。

どの方法でも、各人が納得の上で遊ぶので余りけんかにならず自分たちでうまく処理している。

スムーズに遊ばれている時の教師の援助にはどのようなものがあるのだろうか。教師が幼児の中に入りこんでともに遊ぶこともあってもいいし、その場面から少し離れていることもよい。つまり、幼児たちは、自分たちの関係を自分たちでつくりあげていくことができるからである。

例三は、ある一日の遊びの発展の変化をみたものであるが、まず教師はどのような援助をしたのだろうか。

教師は最初直接参加しないで見守るだけである。教師が誰かきそいかけでもしたら、メンバーも増し、遊びも異なった方へ発展したかも知れないとその段階では教師は反省していた。

時間がたつにつれて、遊びのりものからパンやさんに変化していったので、教師はパンの製作でもしようかと二、三人の子にさそいかけたが、消極的な女児のグループが仲間入りしくさうだったので、ことばをかけて援助してやる。

つぎに、活動的なメンバーならば、必要に応じて自分たちでお金をつくって遊んでいるが、この女児のグループは気がついてそれだけの積極性がなかったので、教師が援助して紙をわたす。

パンをつくることよりも、幼児の興味が、各コーナーによる遊びにつながりができてきたようだったので、教師自身の気持にも見通しがつき、まとまりをつけるための援助としてダンボールの箱を出し、テレビづくりのグループに入る。



個人及びグループの幼児の満足感はどうだったか。

例三のIは、のりもののグループへ仲間入りはさせてもらったが自分の主張は通らなかつた。しかし、がまんできるような方法でいる。その場面から逃避して他の場面で満足を得るとする方法をとらなくても、自分の感情をおさえたら、友だちどうまく遊べるということとは理解しているようだ。

Fは、最初Iの要求をいれないでしりぞけたが、ガソリンがへつたということから、自然のながれで運転手をゆずり、自分は他の役割をつくり友だちと仲よく遊ぶ満足感を味わっている。この時期になると、自己抑制もできるようになってはいるが、けんかになるか、うまくゆずれるか、それまで遊ばれた満足感とその子のパーソナリティーによることがおおいと思われる。

パンやごっこに変化したとき、のりものごっこ大体同じメンパーであるが、L夫がいったんぬけて再び仲間入りする時に、すぐにはいれてもらえない。しかしFが「ぼくは最初の遊びからいた」と発言したことにより、Lも最初は参加していたことをYも思い出して仲間入りさせている。

YはLに対して少しマイナスの感情をもっているのか、他の幼児のようにすぐ受け入れられないように感じた。

役割については、教師が援助しなくても自分たちでどうやらその子が遊びに加われるか考えるようになっているから、一応本人もその遊びに加わりたい気持は満足されている。

消極的なグループは、他のグループへの交流のきっかけができ、

交友関係が広がった。時間が与えられると、友だち同士のふれあいの中でお互いに刺激を与えながら、遊びの幅も広がり、友だちとの交流も広がってくる。そこに満足感プラス成就感すなわち充実感が幼児たちにあふれてくる。このときは、個人の満足ではなく、グループとしての充実感となるのではない。

## (五) おわりに

このように二学期、三学期はグループとしてまとまった活動が活発にされるようになると、そのかげにかくれた幼児たちを見おとしがちになってくる。リーダーとその周辺の子どもたちの関係が明朗であるかどうか。能力のよく似た幼児同士安易な逃避的な遊びをしていることはないか、など、自然発生的な遊びにおける幼児たち同士の関係をみきわめることによって、教師の援助も必要となるだろう。幼児たちは、それぞれの場で表面的には解決したり、逃避したりしているが、その感情をくみとってよい友だちづくりをしてあげるのは教師だろう。

しかし、教師对个人の解決ではなく再び問題を幼児たちになげかける必要もある。幼児の心にもたれているマイナスの感情をプラスの感情とするとともに、幼児が集団の中で活動することにより、満足感をもたせることが、結局、望ましいパーソナリティーを形成していくことになり、それが幼児の友だち関係をより発展させていくことになると思うのである。そこに幼児教育の基本がなければならぬだろう。

(四日市市立富洲原幼稚園)

子どものひとり、ひとりに、なまの人間としてふれること。

幼稚園の四月の出発点には、まずそれが要だ。

ここにきたこの子どもとふれることな  
くしては、この子どもの教育はなされな  
い。先生と子どもとの間に、何  
か中間物をいれて接していたの  
では、その子どもの力になる教  
育は生まれてこない。

計画、月案、週案、日案、こ  
のこまかいこと、提出しなければ  
ならない書類、そういうもの  
を中には自分で子どもとふれた  
のでは、子どもは心を開いて語りかけて  
くれないだろう。子どもの心の中に、す  
ばらしい力が湧き起こってきても、これ  
を見、それに耳を傾ける目と耳が開いて  
いなければ、それを伸ばすこともできな  
いだろう。



やくそくごとである。それを中には

さんで、先生と子どもとふれたのでは、  
子どもの心にもふれることはできない。せ  
いぜい、そのやくそくを守ったか、守れ  
ないかというところで、子どもに接する  
だけである。よい子、わるい子の区別が  
できて、いつつけ口がひろがっ

て……そのとき、子どもと子ど  
もとの間の、生きたふれ合いも  
とまってしまう。

まず、子どもが心を開いてく  
れるように、保育室を自分の家  
の子ども部屋と同じように親し  
みを感じてくれるように、先生  
の心にもふれてくれるように。

それには、教師は幼児との間に中間物  
をおいて接してはならないのである。

四月。幼稚園の新しい月。心をひきし  
めて、幼児と心を通わせ、幼児から学ぶ  
生活の第一歩をすすめてほしい。

## 幼児の教育 第六十七巻第四号

四月号 © 定価八〇円

昭和四十三年 三月二十五日印刷  
昭和四十三年 四月 一日発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚二ノ一ノ一  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一  
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一  
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番  
◎本誌御購読についての御注文は発売  
所フレーベル館にお願いいたします

# GRIMM



グリムの世界をご案内します

グリム名作選〈全6巻〉 定価 各 500円

1. なかぐつをはいたねこ

2. しらゆきひめ 3. ヘンゼルとグレーテル

4. シンデレラ 5. あかずきん 6. ねむりひめ

## トツパンのステレオえほん

■デパート・書店にてお求めください **フレーベル館**

今月の  
幼児のための  
紙芝居です

(株) 教育重劇

東京渋谷千駄谷 5-17-15  
TEL (341) 3400・3227・1458  
振替 東京 29855



たのしい生活シリーズ

**ボビーたんてい長** ￥420円

画・野々口重 大変、誘かい魔だ。そ  
こでボビーの大活やく。

ゆたかな心シリーズ

**どうぶつのおちえくらべ** ￥420円

画・富永秀夫 四つのこわれた歯車か  
ら動物たちの作った物？

名作12集

**うさぎとかめ** ￥420円

画・和田義三 日本民話の決定版!! 現  
代っ子にもなじみ易く

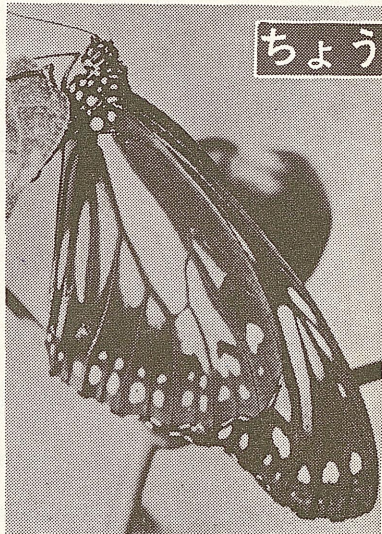
# キンダーブックが育てた もう2つの栄養

香り高いロマンの芽生えと、健やかな家庭教育のために  
おくりする、新鮮な4月号!!

↓キンダーおはなしえほん・4月号



↓キンダーおはなしえほん4月号付録・キンダーずかん



↑ホームキンダー・4月号



幼児を育てる  
3つの栄養!!

## 1 キンダーブック

年齢別による理想的観察絵本 4~5才用 定価を80円  
5~6才用 団体購読価70円

## 2 キンダーおはなしえほん

幼児の成長の糧となるお話絵本 定価110円  
団体購読価100円

## 3 ホームキンダー

園児をもつ母親のための専門誌 定価60円  
団体購読価50円